特集

調査と表現
伝えるための戦略

社会調査は社会を〈知る〉ための技術として発展を重ねてきた。今日それは高度な専門性を有するひとつの世界を形成している。こうした〈知る〉力をより意味あるものとして社会の中で活かしていくために，いま私たちは何ができるだろうか。

本特集では〈伝える〉こととして社会調査を捉え直してみることを提案したい。様々なオーディエンスと関わり合い，調査の成果を表現し，よりよく伝えていくことは，社会調査の社会的意義や社会的役割という見地からも重要であろう。

第一論文では，社会調査史の源流にある表現への志向を手がかりに「調査と表現」に関する問いの構図を展望する。石倉義博氏・西野淑美氏による第二論文では，学術的知見の提示のあり方や，調査者としての地域への関わり方について論じる。亀井伸孝氏による第三論文では，表現の媒介としての「視覚」に着目し，それを活用することの可能性と諸問題について論じる。青木深氏による第四論文では，調査の成果を「書く」行為に着目し，それが調査者と読者を結ぶ多元的な時間を編成していくさまについて論じる。小倉康嗣氏による第五論文では，社会調査の社会的実践性とその課題を，パフォーマティブな調査表現を試みた経験を踏まえて論じる。

（松尾浩一郎）

特集論文

1

社会調査のなかの表現
失われた技術の再発見を

松尾浩一郎
帝京大学経済学部 教授

1　なぜ表現を問題にするのか

社会調査は長い歴史を重ねるなかで高度に発展してきた。今日では，学術の世界においても実務の世界においても，他では代えられない重要な役割を社会調査が担っている。こうした役割を果たす基盤となっているのは，社会調査固有の技術や方法論の体系である。これまで社会調査に関わってきた先達が築きあげてきたそれは，われわれにとって欠かすことのできない共有財産となっている。

なかでも社会調査の発展を支えたのは，主としてデータ収集とデータ分析に関する技術の洗練化であった。改めていうまでもなく実際の社会調査活動には，実査前の構想の段階から調査で得られた知見をもとにした考察や発表まで，ときには長期にわたる複雑な過程がある。その一つ一つの段階すべてには重要な意味がある。しかしそうであっても，社会調査の方法論を追究し技術の向上をめざそうとするとき，やはり焦点はデータ収集とデータ分析に絞り込まれるのが一般的であった。

試みに社会調査の過程を単純化して，調査者がデータないし情報をどのように扱うのかという面にとくに注目して模式化すると，インプット（調査対象である人や社会からデータを得ること），プロセス（データを集計し分析すること），アウトプット（自身の調査を他者や社会に伝えること）の3段階に整理することができる。この図式に当てはめてみると，これまでの社会調査の大勢は，主にインプットの部分とプロセスの部分に特段の関心を集中させてきたといえるだろう。もちろん例外は様々にあるだろうが，量的調査においても質的調査においても，こうした傾向は共通して認められるように思われる。

アウトプットの要素は社会調査の発展過程のなかで比較的軽視されてきたが，それが重要でないというわけでは決してない。これまで他の二者が優先されてきたことに故なしとはしない。だが，前述したような形で社会調査の全過程をひとつのシステムとして捉えるならば，アウトプットに対する関心や工夫は，不均衡なまでに低いのは明らかであろう。

社会調査に携わる者は，今こそアウトプットについてもよりいっそう重視していくべきなのではないだろうか。調査をいかに表現し伝えていくかを，より意識的に追究することが望まれるのではないだろうか。それはなぜか。その理由ないし背景となる点を，これからいくつか挙げてみよう。

まず第一に指摘したいのは，現代では専門家に対して情報開示やアウトリーチが期待されていることである。専門家に期待される社会的役割は時代とともに変化している。その良し悪しはさて措くとしても，そうした期待が高まる趨勢にあることは確かであろう。専門家でなければ理解しづらいように書かれた論文や報告書を，

自身の属するコミュニティ内の媒体に発表するだけでは，それらの期待に応えたとは言い難い。社会の求めに応じることは，社会とともにあるべき社会調査にとって重要な課題のひとつとなるだろう。それはまた，社会調査の存在や意義を一般社会に向けて示すことにもつながるであろう。

第二は，社会調査に関わる人々の間でも，細分化した専門分野の壁を超えたコミュニケーションを深めるのは簡単ではないことである。一般的にいって，データ分析の結果は，その分析手法をよく知る者にとって最も「理解」しやすい形式に沿うように書かれる。しかしここでいう「理解」とは，非専門家にとっての「理解」とかなり隔たったものであるのは珍しくない。量的調査から質的調査まで百花斉放のただなかにある現在では，専門家同士でさえ調査の内容を深く理解しあうことは存外に難しい。専門家の論理としては，読み手はまず勉強して自らのリテラシーを高めるべきだということになるかもしれない。しかしそれだけでよいのだろうか。また，もし社会調査という営みをひとつの独立した職能として位置づけようとするならば，社会調査に関わるわれわれの間での相互理解を，より深められるように努力することは重要になるのではないだろうか。

第三は，データを扱う技法の発展に伴って，社会調査が明らかにしようとすることの複雑さや精細さがよりいっそう増していることである。たとえば，今日の質的調査のフロンティアでは，新しいアプローチの開発などとともに，さらに意味世界の襞の奥の奥へと探究が進められている[1)]。質的調査においては，量的調査のようにはデータの縮約や知見の一般化をめざさないのが通例であるから，データを緻密に扱えば扱おうとするほど，そこから生まれる調査結果は複雑なものとなりやすい。その複雑さは，質的調査が追い求める「質」を担保する重要な源となりうる。しかしそれと同時に，具体的に何をどう明らかにしたのかという調査の根幹が藪のなかに絡め取られてしまう罠にもなりかねない。ここでは質的調査を例に挙げたが，もちろんそれだけには限られないであろう。誰にとっても，高度なデータ分析技法を手にすればするほど，社会調査の全過程のなかでデータ分析の局面のみに，知らず知らずのうちに過度に集中してしまう危険があるのではないだろうか。

もちろん，アウトプットへの関心，つまりよりよく表現し伝えていこうという意欲を強く持続的に持っていたものが，これまでの社会調査のなかになかったわけではない。しかし，そうした例は必ずしも多いとはいえない。

他方，これから次節で概観するように，社会調査の長い歴史をさかのぼってみると，今日よりもむしろ黎明期に，アウトプットや表現に力を注いでいる例が見られる。このことは注目に値する。社会調査における表現は，もしかしたら「失われた技術」なのかもしれない。もしそうならば，なぜそれは失われてしまったのだろうか。この問題は検討に値する。

今日われわれは，社会調査におけるアウトプットや表現の意義や可能性について，もっと目を向けてよい。それは，社会のなかでの社会調査のあり方を捉え直し，よりよいものへと高めていくことにもつながるであろう。表現の次元に注目することで，社会調査のまた別の側面に光を当て，その可能性をさらに広げていくことができるのではないだろうか。

2 社会調査史にみる表現

近代社会調査の黎明期

歴史から学べることは様々にあるが，なかでも黎明期に目を向けることで得られる気づきは独特である。黎明期には原点とでもいうべきものが生々しい形で表出していることが多い。社会調査の歴史においても，先駆者たちの姿から，そうした様々なものを見出すことができる。表

現することや伝えることに対する強い意識も，そのひとつである[2)]。

まず近代的な社会調査の原点とされるC・ブース（Charles Booth, 1840-1916）に注目しよう。ブースの名は，1886年から17年の年月を費やして行われたロンドン調査の主宰者として広く知られている。世界に冠たる近代大都市であるロンドン全域で，通り一本一本にいたるまで文字通り地を這うような踏査を行い，とくに貧困問題に焦点を合わせて，そこに暮らす人々の生活を詳らかにしている[3)]。その最終報告書である全17巻の『ロンドン住民の生活と労働』（Booth, 1902-1903）は，社会調査史上の金字塔ともいうべき名著として大変名高いものである。

社会調査の歴史をブース以前にまで遡ることも難しくはないが，大きな衝撃をもって世間に受け入れられたロンドン調査の影響力は，社会調査の祖ともいうべき地位をブースに与えるに十分なものであった。

ロンドン調査が大きな影響力を持つようになった要因は，何よりそれが明らかにしたことがセンセーショナルだったからであろう。ブースの主張するところでは，世界随一の繁栄を謳歌していたヴィクトリア時代のロンドンにおいて，貧困状態にある住民が3割にも達しているのだという。この調査結果に接して驚かないでいられた者は，果たしてどれほどいただろうか。ブースは社会調査によって近代大都市が内に抱えていた貧困を可視化したのである。

いまブースが貧困を可視化したと述べたが，ロンドン調査の知見やそこから展開された議論は実際には膨大かつ錯綜したものであり，容易に全貌をつかめるようなものではない。しかしそれでいて，調査結果の核心を効果的に広く社会に伝え，大きな影響を及ぼすことができている背景には，調査表現上の工夫があったことも見逃せない。

とくに注目したいのは社会地図を活用したことである（4ページ扉写真参照）。ブースの社会地図は「貧困地図」として知られている。多色刷の地図が12枚作成されており，おおむねロンドン全域をカバーできるようになっている[4)]。実地調査によって得た各街路ごとの生活状態を7段階に分け，上層から下層にかけて黄色，赤色，桃色，灰色，水色，青色，黒へと色分けしている。文字通りに通りひとつ隔てるだけで，まったく異なる生活世界が広がっていることを明瞭に示している。鮮やかな色彩で詳細に描かれた貧困地図のロンドンは，人々に知られていなかった容貌をはっきりと露わにするものであった。

社会地図というビジュアルな表現は，それまで隠されてきた貧困を可視化するというブースの狙いにはうってつけのものであった。17巻にも及ぶ膨大な報告書を通して読まなくても，地図を眺めるだけでブースの主張の大要は十分に感じとることができる。

社会踏査運動

ブースの影響力は，ロンドンでの貧困問題の議論としてだけでなく，社会調査の方法論的な範型としても世界中に広まった[5)]。19世紀末から20世紀初頭にかけて，ブースに倣うかのような調査が各地で次々に行われ，その奔流はいわゆる社会踏査運動（social survey movement）へと展開していった（Bulmer et al., 1991）。

社会踏査運動の大きな特徴は，社会問題の発見，社会政策や社会改良の実践，そして社会一般の啓発を強く意識した活動であることにあった。そのためもあってか，ブースと同じように，あるいはそれ以上に，表現への強い志向を認めることができる。

社会に向けて伝え，訴えるという性格が色濃くあらわれている社会踏査運動の象徴的な事例として，P・ケロッグ（Paul U. Kellogg, 1879-1958）らが行ったピッツバーグ調査を取り上げてみたい。

ケロッグはアメリカを代表する社会改良家・ジャーナリストのひとりとして知られている

(Chambers, 1971)。彼は自身が編集する雑誌『サーベイ』を拠点として，積極的に社会問題に関わっていった。その特徴は，誌名の通り調査――彼の言葉でいえば「観察と報告」――を重視したことである。ケロッグは雑誌というメディアを調査報告の場として活用していく。

ケロッグは社会改良家として社会踏査運動に傾倒していくなかで，調査プロジェクトの組織者としての役割も果たすようになる。調査者としての彼の活動が最高潮に達したのは，1907年から翌年にかけて行われたピッツバーグ調査においてである（Greenwald and Anderson, 1996）。

ピッツバーグ調査は広い視野を備えた大規模な総合調査であった。地理，政治経済，鉄鋼労働者，家族の生活，女性労働，移民，地域社会などが主な調査対象となっている。調査チームには経済学者，政治学者，社会学者，ジャーナリスト，社会事業家などが多数参加した。産業化が進む大都市が生み出した複雑な社会問題を，学術からジャーナリズムまでの様々な力を動員して明らかにし，それに立ち向かっていこうという問題意識が底流をなしていた。ブースのロンドン調査からの大きな影響も受けている。結果として，アメリカにおいては前例のない規模を誇る社会調査となった。

ケロッグはブースと同様に職業研究者ではなく，アカデミアとの間には一定の距離があった。彼の編集者としての感覚は，ピッツバーグ調査の端々にあらわれている。報告書は数字や統計表などの分析結果の羅列ではなく，全編が読み手へ訴えかけるような，読みやすいものとなっている。報告書は膨大であるが，写真，絵画，地図，図表が多用されており，親しみやすい雰囲気がある。写真撮影には「ソシオロジカル・フォトグラファー」として知られるL・ハインを起用した[6]。ハインは調査チームの一員として現地に足を運び，様々な撮影を行った。その写真には，移民労働者などのピッツバーグ住民の生活が見事に表現されている。

ケロッグの調査は「調査のための調査」ではなかった。「観察と報告」を旨とした彼の調査は，単に調べるだけでは完結せず，それを世に伝えることが不可欠な柱となっていた。広く世間に訴えて，世界を変えようとした[7]。そのための媒体が雑誌『サーベイ』だったのである。

社会調査方法論の模索のなかで

初期の社会調査者たちが表現への志向を強く持っていたことは，ブースやケロッグの事例だけでなく，様々なところから看取することができる。

たとえば，地域社会調査の古典となっているリンド夫妻のミドルタウン調査（Lynd and Lynd, 1929）は，学術書というより，一般書としてベストセラーになったのだという（園部，2008）。リンドのモノグラフ『ミドルタウン』は，文学的な滋味のある文章表現で書かれているが，それは一般読者にも受け入れられることにつながる工夫のひとつだといえるだろう。

これまで取り上げてきたような個々の調査事例からではなく，社会調査の方法論が彫琢され技術としてパッケージ化されていく過程からも，当初は表現への志向が強かったことを窺い知ることができる。このことを社会調査法の教科書での記述のされ方から見てみたい。

アメリカにおいて社会調査の教科書が出版されるようになったのは1910年代頃からであるが（Platt, 1996: 14-15），なかでも，早い時期に大きな影響力を及ぼした教科書を挙げるとするならば，P・ヤングが1939年に著した『科学的社会調査法』に指を折るのも適当であろう。本書は1960年代後半まで幾度も改版され，長きにわたって広く利用されている。

その初版（Young, 1939）を見ると，データ分析技術の解説に紙幅を割く今日の教科書とは，かなり異なる構成と内容からなっている。全600ページ余りのうち，冒頭の100ページは社会調査史についての記述に費やされている。その

後ようやく技法の解説へと進んでいくが，その内容や書かれ方も今日のそれとは大きく異なる。まず「データとは何か」について考察した上で「フィールドでの科学的な観察法」へと論を進めていくのだが，そこで「科学的な観察法」のひとつとして写真撮影が大きく扱われている。さらに続けて質問紙作成法，インタビュー法，歴史資料の分析法，事例研究法，統計分析法と進んでいくが，こうしたデータ収集と分析の方法が説明される章を受けるのが，「グラフィック・プレゼンテーション」の章なのである。ここでは各種のグラフや地図やダイヤグラムを使って，いかに表現するかが詳しく説明されている。

このように，写真やグラフ，地図といったビジュアルな表現手法を積極的に取り入れて「科学的社会調査法」を構成していこうとする方向性が，当初は存在していたのである。

3　失われた技術

アカデミズムと社会調査

初期の社会調査が表現に積極的であったことは，それらの調査が行われた文脈や，担い手の立場とも深く関わっている。過度の単純化を恐れつつあえていえば，多くの社会調査が学問研究のためでなく，社会改良のために行われていた。また，社会調査は学究を目的とした大学人のものではなく，実践家のものであった。こうした状況が大きな影響を及ぼしていたのである（松尾，2015）。

そもそも20世紀はじめの大学には，社会調査が一定の地位を築けるような余地はなかった。社会科学はかろうじて大学のなかに小さな居場所を確保するのみであった。また，社会科学研究も論壇も書斎志向が強く，経験的研究，つまり社会調査に懐疑的であった[8]。

大学人が大学の世界のみを念頭において発言する場合，議論の土台となる文脈，つまりアカデミア内の流儀や学問の体系を濃密に共有しているので，すでに確立された一定の形式にのっとって表現すれば，伝達やコミュニケーションは十分にできる。

しかし，アカデミアの外で，広く社会一般に向けて活動していた初期の調査者にとっては，自分の知見をいかに伝えるのかについて工夫が必要なのは自明のことであっただろう。一般には知られていない社会的現実や，知らしめたい問題状況を，自ら獲得した経験的データを武器にして，多くの人に伝え理解してもらおうとする。そのためにも，いかに表現するかという部分も喫緊の課題になったのである。

このような状況が大きく変わりはじめるのは，1920年代前後のアメリカにおいてである。アカデミアのなかに社会学が地歩を占めるようになり，また，社会学は自らの手法として社会調査を積極的に取り込んでいく。

この変化の背景には，社会調査や社会学だけには限られない，大学や学術や科学をめぐっての大きな転換があったのは見逃せない。詳述する紙幅はないが，とくに指摘しておきたいのは，社会学が科学の観念を吸収し，それを基盤として再編成されていったことである[9]。

社会調査が社会学の一部としてアカデミアの内部に編入されたことは，表現への志向やそのあり方にも，大きな変化が生じることを促す契機となっていく。

社会調査の制度化と科学主義

1920年代前後のアメリカで生じた社会調査をめぐる様々な変化を象徴するのは，シカゴ学派社会学の確立と台頭である。ここでは当時のシカゴ学派の動きを事例として，調査と表現の問題について考えてみたい。

1892年に設立されたシカゴ大学社会学部を拠点とするシカゴ学派社会学は，とくにシカゴという都市を「社会的実験室」に見立てた一連の研究で知られている。なかでもR・パーク（Robert E. Park）の影響のもとで行われた「ズボンの尻

を汚す」ような参与観察を中心するフィールド調査と,それに基づいて書かれたモノグラフの数々は,シカゴ学派を代表する輝かしい業績となっている（宝月・中野,1997)。

とはいえこのような印象は一つの側面でしかない。シカゴ学派社会学は変化に富んだ複雑で多面的な顔を持っている。たとえば,参与観察を推奨したパークは今日の質的調査に近い立場,自然主義や人文主義に近い立場の調査者であったと思われるかもしれないが,むしろ彼は,科学主義的な社会学の建設を強力に先導した張本人でもあった。

パークがシカゴ大学に在職したのは1914年からのおよそ20年間であるが,この期間を通じて彼に率いられたシカゴ学派が推し進めたのは,「科学としての社会学」(Park and Burgess, 1921)を確立することであった。それは,アカデミアのなかに確固たる地位を築くための運動でもあった。ちょうどこの頃,大学の学問をめぐる状況は,書斎志向から経験科学志向へと転換が進んでいた。パークらはこうした科学主義志向の趨勢を先んじてキャッチアップし,明確なディシプリンを共有した研究者集団を形成していった。また,学術誌を編集しそれを統制していくことを通じて（Abbott, 1999),社会学の「制度化」を進めたのである（Bulmer, 1984)。

制度化が進むということは,そこに新しいアカデミック・コミュニティができあがることを意味する。それは,ひとつの専門分野が確立し成長するために極めて重要な役割を果たす[10)]。しかし,調査者が自分の調査を伝えるオーディエンスとして,そのコミュニティだけに目を向けるようになってしまう誘惑も,そこにはあるのではないだろうか。

また,このような制度化は,学問の発展や成熟や拡大をもたらすと同時に,制度にそぐわないものを排除する動きにもつながりうる。社会調査を取り込んだ社会学の制度化過程においても実際にそうであった。パークらによって科学主義に向けて舵を切られるまでの初期シカゴ学派社会学やピッツバーグ調査は,激しい批判の対象とされ,それはしだいに無視へと変わり,学界や学史のなかでの位置づけを失っていった。また,アカデミアとは別の立ち位置から社会学的な研究や社会調査に関わっていた者たちは,この新しいアカデミック・コミュニティからは排除されていった[11)]。

制度化と科学主義が表現のあり方に影響を及ぼした例として,専門誌における写真の扱い方の変化は象徴的である。シカゴ大学で1895年に創刊された『アメリカ社会学雑誌』(AJS)は,当初は写真を含む論文を少なからず掲載しており,1916年までに31編を数えている（Stasz, 1979)。しかしそれ以降,つまりシカゴ学派が科学主義路線をとりはじめて以降は,写真は誌面から見られなくなる[12)]。誰にも届きやすい豊かな表現力を持ちつつも曖昧さを含む写真は,科学論文にとって不適切なものとされ,捨てられていったのである。

4 今日の社会調査における表現

1930年代頃までに着目して議論を進めてきたが,翻って今日の状況はどうか。

調査と表現をめぐる環境は大きく変わっている。社会学が科学主義へ向かう趨勢は,1970年代には曲がり角を迎えている。また,表現に活用できる様々な技術の発展と普及はめざましい。第1節で触れたような専門家をとりまく社会状況の変化も見逃せない。

そのようななかで,よりよい調査表現をめざす試みもしだいに増えはじめている。すでに詳述するための紙幅は残されていないこともあり,そうした表現への試みの現在については,本特集の第二論文以降に譲りたい。そこには注目すべき多様な挑戦があり,また,今日の社会と社会調査にとって重要かつアクチュアルな諸問題がある。

最後にごく簡単にではあるが，今日社会調査に携わるなかで表現の問題に取り組もうとしているわれわれにとって，課題となっていると思われる点を三つ指摘しておきたい。

第一の課題は，よりよい表現をめざす試みは増えつつあるとはいえ，質量ともさらなるチャレンジが必要だと思われることである。

第二の課題は，より表現への志向を強めるとしても，それによって調査の質を低めることがないような工夫が重要になると思われることである。

第三の課題は，外部からの要請に対する義務として消極的に表現に取り組むのでは不十分だということである。つまり，自らの調査を内から高めていく回路のひとつとして表現に取り組むことが望ましいのだと主張したい。社会調査とは，調査者と被調査者，あるいは調査者と調査成果を受け止める社会との関わりのなかで成り立つ社会的営為である。そうした対象に向けてどのように表現し，伝え，コミュニケートしていくのかは，社会調査の存在そのものにも関わりうる重要な問題なのである。

注

1）ここでの記述に質的調査を取り上げているのはあくまでも一つの例としてである。いうまでもなく，それ以外の様々な社会調査の場でも，常に革新や深化が進んでいるであろう。

2）以下の記述の一部には松尾（2015；2016）での議論を再論したものが含まれている。

3）ブースのロンドン調査についてはO' Day and Englander（1993）に詳しい。

4）貧困地図は「チャールズ・ブースのロンドン」と題したLSEのデジタル・ライブラリー（http://booth.lse.ac.uk）でも公開されている。

5）ブースの方法は「社会踏査」（social survey）と称される（Easthope, 1974）。Surveyという語が使われる点では，今日一般に「サーベイ調査」（survey research）と呼ばれるたぐいの調査と同じだが，調査方法としては両者は無関係ではないものの実質的に別であると理解しておきたい。

6）写真家ハインの人と生涯についてはKaplan（1992）に詳しい。

7）ピッツバーグ調査は当時のアメリカ社会事業界や社会学界に大きな衝撃を与えた。シカゴ学派社会学が都市調査に乗り出していく際にも，ピッツバーグ調査は無視できない重要な先行研究として準拠点にせざるをえない存在であった。

8）マーシュ（Marsh, 1985）が紹介するところでは，1880年代にロンドンで貧困調査を行ったH・メイヒューは，「まったく信用できない貧者自身の言い分をデータとしたせいで公知の事実に矛盾した結果をみちびいている」という旨の批判を受けたのだという。現場で当事者を調査したことが，研究としての評価を高めたのではなく，むしろ低める結果となったのである。

9）19世紀の社会学は，少なくともアメリカでは，現在でいうところの「社会科学」というよりは，哲学や宗教，社会運動に近い存在であった。そのありさまについては宇賀（1976）を参照。

10）実際にその後もシカゴ大学を中心として社会調査は飛躍的な発展を遂げており，シカゴは社会調査界の中心のひとつであり続けている。

11）とくに排除されていったのは，キリスト教運動，社会事業，社会改良といった背景を持つ社会調査の系譜であった。さらに付け加えると，それらの担い手に女性が多くいたことも，男性中心主義のアカデミアから排除される一因になったという。Deegan（1988）を参照。

12）社会学論文からの写真の排除は，日本でも同様のことが繰り返されている。『社会学評論』の創刊号（1950年）には写真を多用する論考が掲載されているが，次に写真が誌面に登場するのは，書影写真が一度掲載されたのを例外とすれば，1998年である。また，調査者が自らフィールドで撮影した写真に限ると，さらに2009年まで待たねばならない。

文献

Abbott, A., 1999, *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*, University of Chicago Press.（松本 康・任 雪飛訳, 2011,『社会学科と社会学 ――シカゴ社会学百年の真相』ハーベスト社。）

Bulmer, M., 1984, *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*, University of Chicago Press.

Bulmer, M., K. Bales and K. K. Sklar, eds., 1991, *The Social Survey in Historical Perspective 1880-1940*, Cambridge University Press.

Booth, C., 1902-1903, *Life and Labour of the People in London*, 3rd ed., 17 vols., Macmillan.

Chambers, C. A., 1971, *Paul U. Kellogg and The Survey: Voices for Social Welfare and Social Justice*, University of Minnesota Press.

Deegan, M. J., 1988, *Jane Addams and the Men of the Chicago School, 1892-1918*, Transaction Books.

Easthope, G., 1974, *A History of Social Research Methods*, Longman.（川合隆男・霜野寿亮監訳, 1982,『社会調査方法史』慶應通信。）

Greenwald, M. W. and M. Anderson, eds., 1996, *Pittsburgh Surveyed: Social Science and Social Reform in the Early Twentieth Century*, University of Pittsburgh Press.

宝月 誠・中野正大編, 1997,『シカゴ社会学の研究 ――初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣。

Kaplan, D., 1992, *Photo Story: Selected Letters and Photographs of Lewis W. Hine*, Smithsonian Institution.

Lynd, R. S. and H. M. Lynd, 1929, *Middletown: A Study in American Culture*, Harcourt Brace and Company.

Marsh, C., 1985, "Informants, Respondents and Citizens," in M. Bulmer, ed., *Essays on the History of British Sociological Research*, Cambridge University Press: 206-227.

松尾浩一郎, 2015,『日本において都市社会学はどう形成されてきたか――社会調査史で読み解く学問の誕生』, ミネルヴァ書房。

松尾浩一郎, 2016,「社会調査の表現史――社会に訴える調査者たち」『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報人文編』22：11-34。

O' Day, R. and D. Englander, 1993, *Mr Charles Booth's Inquiry: Life and Labour of the People in London Reconsidered*, Hambledon Press.

Park, R. E. and E. W. Burgess, 1921, *Introduction to the Science of Sociology*, University of Chicago Press.

Platt, J., 1996, *A History of Sociological Research Methods in America 1920-1960*, Cambridge University Press.

園部雅久, 2008,『ロバート・リンド――アメリカ文化の内省的批判者』東信堂。

Stasz, C., 1979, "The Early History of Visual History," J. Wagner, ed., *Images of Information: Still Photography in the Social Sciences*, Sage, : 119-136.

宇賀 博, 1976,『「社会科学」から社会学へ――アメリカ社会学思想史研究』恒星社厚生閣。

Young, P. V., 1939, *Scientific Social Surveys and Research: An Introduction to the Background, Content, Methods, and Analysis of Social Studies*, Prentice-Hall.

特集論文

2

調査者として地域に関わること
「希望学」釜石調査から

石倉義博
早稲田大学理工学術院 教授
西野淑美
東洋大学社会学部 准教授

1 調査を行なう意義と調査に協力する意義をつなぐ

調査者は，調査に協力してくれる人々や地域とどのような関係を結んでいくのか。これは，改めて述べるまでもなく，多くの調査・研究者が直面してきた課題である[1)]。調査者にとっての調査の意義と，調査対象者にとっての調査に協力する意義との間には，ずれが生じる可能性がつねに存在する。2つの意義の間をいかにつなぐかに心を砕くことと，調査をどのように表現し，他者に伝えていくかという今回の特集企画の関心とは，根底ではつながっているのではないか。

本稿では，このような問題関心に沿って，われわれ2名が10年以上にわたって関わってきた岩手県釜石市での調査体験を振り返ってみたい。とはいえ，手探りの連続で，何かを体系的に示すことができるわけではない。しかし，2つの意義の間のずれをどう考え，どう対応するかは，結局はそれぞれの調査者がそれぞれの状況で模索するしかないようにも思える。

われわれが釜石に関わり始めたのは東日本大震災以前の2006年であり，東京大学社会科学研究所の研究プロジェクト「希望学（希望の社会科学）」のメンバーとしてであった。このプロジェクトは，東日本大震災を経て現在も釜石市に関わり続けている。同プロジェクトは数十名の社会科学系研究者がゆるやかに連合しつつ，各自がさまざまな調査研究を行なっているため，釜石との関わり方はつねに多様であった。

希望学釜石調査，また続く福井調査では，調査研究に注力して論文として成果発表をするだけでなく，市内での一般向けシンポジウム，生涯学習的な講演会やセミナー，一般読者も想定した書籍の出版，中高生を対象とした講演やワークショップ，市の広報誌での調査結果の連載なども，10年の間に折に触れて行なってきた。また，釜石の方や釜石に縁のある方々を東京に招いて研究会を行なったことも幾度となくある。

そのようななか，釜石市は東日本大震災において甚大な津波被害に見舞われた。社会科学者ができる即効性のある貢献は見あたらない状況のもと，「記録を残す」ことにまずは取り組んだ。その後は，個々の研究者がどのように関われるかを模索し，活動を続けてきた。

われわれ2名も，釜石市内の高校卒業者に震災前に行なった質問紙調査，震災直後のオーラル・ヒストリー収集，震災後に毎年継続している質的縦断調査など，さまざまなかたちで調査研究に関わってきた。同郷団体や同窓会など関東で開かれる釜石出身者の集まりに参加することもある。その都度異なるメンバーとチームを組み，希望学プロジェクト本体で活動したり，希望学とつながった研究者による独自のチームとして動いたりしてきた。

このように希望学の動きは多岐にわたっており，地域への関わり方に対する考えもメンバー

間で異なっている。ただし，希望学では当初から調査先の地域に寄り添って調査し，ともに考えることを意識する一方で，対象からの独立というスタンスを維持してきた。プロジェクト代表の玄田有史の「自治体などからの金銭的な支援を一切いただかないという方針で行なってきた。理由は政策の評価などにおいて，中立性を保つと同時に，県や市町に対して何ら遠慮することなく，私たちの感じたことや発見したことを率直に表現したいと考えたからである」（玄田，2013：425-426）という記述は，調査者にとっての研究の意義を堅持することの明言でもある。

しかし，だからといって，研究成果の提示に留まることを選んだわけではない。むしろ，調査に協力する意義を調査対象者に対して示すよう要請される現代において，調査者と被調査者の境界を意識的に維持したうえで，被調査者からも，また行政からも独立性を保とうとする希望学のスタンスが理解されて受け入れられるためには，つねに地域に向けて自分たちを表現していく必要があったのだとわれわれは考える。

周知のとおり，釜石は1950年代の東北大学新明研究室，1970年代の中央大学田野崎研究室の調査をはじめとする優れた社会調査の蓄積がある地域である。しかし，研究者として地域の構造を明らかにすることが主眼にあったそれらの時代から状況は変化し，希望学のように「対象への関与を明確に出している調査は今回が初めてだと思」うとの指摘を受けることもあった[2)]。

調査者にとっての調査の意義と，調査対象者にとっての調査に協力する意義を両立させるためには，さまざまな関わり方を模索する必要があった。そう書くと，打算的に聞こえるかもしれない。ただ，結果として，希望学の釜石への関わりは10年を超えた。長く続けることは，その関わりが真剣だというメッセージとして伝わる。そして，長く続けるためには，関係をメンテナンスし続けて，受け入れてもらえる状況を維持し続ける努力が必要でもある。それは，われわれが述べるまでもなく，地域に密着した調査を続けている研究者にとっては当たり前の行動であろう。

以下では，調査者にとっての意義と調査対象者にとっての意義との間で変化し続ける均衡点を探しながら，地域に長く関わり続けることを可能にするために，われわれが模索してきた試みを紹介したい。なかでも震災後に毎年継続している質的縦断調査を，中心に取りあげる。

2 東日本大震災以後の希望学プロジェクトと釜石調査

先述の通り，われわれの研究グループは，2006年より希望学プロジェクトの一環として，釜石市で調査を実施し，縮小していく地方都市で，釜石市出身者の地域移動を伴う進学・就職・定住に関するライフコース研究を行なってきた[3)]。震災後，われわれも研究グループを再組織し，この問題意識を継続，発展させるかたちで，調査を再開した。

2011年8月には被災世帯全戸調査である「釜石市民の暮らしと復興についての意識調査」[4)]，同年9月からは震災直後の釜石における「現場」の状況，判断，行動をオーラル・ヒストリーの手法によって記録に残す「震災の記憶」プロジェクト[5)]に参加した。そして2012年8月からは，特定の地区住民の生活再建過程を継続的に追う質的縦断調査を毎年実施している。以下では，この縦断調査がどのようなコンセプトのもとに設計されたのか，試行のプロセスを示すことにしたい。

同じ地域で被災した人々であっても，住宅再建を含む生活再建の意向，最終的な判断，またその過程はそれぞれ異なりうる。持家での住宅再建には相応の費用がかかるが，現行制度では個人の住宅は個人の力で再建するという原則があるため[6)]，住宅再建の判断の過程とその結果は，個々の被災者の多様な社会的条件につよく依存することになる。持家再建か，災害復興公営住宅（以下，復興住宅）入居か。震災前に住んでい

た地域に住むのか，別の地域に移るのか。各々の短期的・長期的な資金力，ライフコースの展望，本人だけでなく親や子の状況などにより，判断は違ったものになる。一方，時間の経過とともに，復興に関する制度や計画，また個々の世帯の事情も変化していく。そのような可変的な要素がどのように各世帯の判断を変化させるのか，また，流動的な状況のなかでどのように，どの段階で生活再建の判断を下すのか。生活再建に関する調査には，微視的かつ継続的な視点が必要であると考えられた。

このような問題意識のもと，われわれは2012年夏以降，震災発生前の時点で同一の町内会の範囲に居住していた40数世帯を対象として選定し，同一世帯に毎年聞き取りを行なう調査を設計し，実施してきた（石倉，2014；西野，2014；西野ほか，2017）。調査設計としては質的縦断調査（パネル調査）であるため，同じ地域の被災者の間での再建への考え方や実際の再建過程の差異が比較できる。また同一世帯のなかで時間の経過により再建判断が変化した場合も，全体のなかでの割合の変化ではなく，個々の世帯の変化として把握することも可能となる。

被災住民の生活再建過程に関する調査設計としては，例えば，同一の仮設住宅団地入居世帯を母集団に設定し，縦断調査を行なうという方法もありえ，こちらの方が調査は容易であるとも考えられた。しかし，釜石市の場合，同一地区の住民であっても，市内各地の仮設住宅に分散して入居しており，特定の仮設住宅団地の居住者が震災前の地域や生活状況を再現するとはいえない状況であった。

また，仮設住宅からは，時間の経過とともに，自宅再建を行なう者，復興住宅に入居する者，あるいは別居していた家族と同居する者などが退去していく。同一の仮設住宅団地を対象とする継続調査では，その時々の仮設住宅入居者の状況の把握には適していても，仮設住宅を離れた者の移動先や，移動理由を追うことは難しい。また，その仮設住宅団地が集約，廃止されると，調査継続自体が困難になる。生活再建を過程として捉える場合，仮設住宅の居住時期は中間段階だと考えられたため，震災前の居住地を基準に，仮設住宅への入居・居住を含めた震災後の移動を追うような縦断調査という調査設計を採用した。

しかし，縦断調査という設計を採る以上，継続的に調査を続けることが最も重要となる。継続には対象者，地域との信頼関係が当然必要であるが，それに加えて，研究資金面での継続性も不可欠である。身の丈に合わない調査規模を設定して，資金が続かず途中で調査打ち切りとなっては意味がない。そのため，不確定な競争的研究資金に頼らずとも，ある程度は調査が継続できる規模の調査を設計し，そこから集落単位，町内会単位での調査の実施可能性を探った。

調査のあり方を模索するなか，A地区町内会（以下，A町内会）では震災直後から町内会長，役員が中心となって各避難所を回り，会員の安否を確認し，その後も町内会報の配布を続けていること，また住民層の多様性がありつつ，震災前から地域の活動がさかんな地域であったことを知り，当時の町内会長に相談し，調査への協力を得ることができた[7]。

A地区は，1955年の市町村合併により釜石市となったZ旧村部の一角にある。2010年の国勢調査におけるZ旧村部の人口は2,354世帯，6,390人であった。また，東日本大震災の釜石市全体の死亡者・行方不明者のうち約6割の586人がZ旧村部居住者（住居地ベース）であった。A地区も津波の被害は大きく，町内会資料によると2010年の世帯数約220のうち震災直後の時期に自宅に住み続けられたのは25世帯にすぎなかった[8]。

A地区には，津波で全壊した住宅，半壊した住宅，被害を受けなかった住宅が混在している。また，土地の嵩上げ等を行なう復興土地区画整理事業区域に指定された場所と，されなかった場所も町内に混在しており，調査開始時点でも，生活再建の過程が多様かつ複雑になることが予

想された。

同じ町内でも被災状況の違いが大きいため，聞きやすい人を対象とするのではなく，元の家の場所が偏らないよう，また世帯構成や世帯主の世代も多様となるよう割当て条件を定めた。町内会長等に選定条件に該当する世帯の紹介を受け，調査協力に同意の得られた世帯を対象に聞き取りを実施している[9)]。また，調査は町内会の協力，紹介のもとに行なうが，町内会に対しても，また復興関連事業に対しても，あくまで「中立を保つ」ことを毎年の依頼時に明示している。

聞き取りは，世帯主および／または世帯主の配偶者に，毎回約1〜2時間の半構造化インタビュー形式で行なっている。初回の聞き取りでは，発災時の避難行動を口切りに，被害状況，避難所での生活，その時々の気持ちとその変化，仕事の状態と変化，困っていること，気がかりなこと，希望を持っていること，今後の住宅再建の形態と時期，契機となる事象等を尋ねている。また，翌年以降は，前年の聞き取りからの1年間で状況や意識，以降に変化があったかどうかを中心に聞き取りを行なっている。

聞き取りは，毎年8月〜9月に行ない，その他にも報告書に掲載する原稿案の確認のために翌春に釜石を訪れて半年間の変化をうかがったり，2015年からは9月下旬に開かれる神社の祭礼にも参加して，聞き取りではなかなか見えないA町内会会員間の交友関係や，祭礼行事での氏子集団の役割分担，町内会としての祭への関与の仕方についても観察を続けている。このようなかたちが，われわれの対象者との関係のつくり方，維持の仕方である。

3 住宅再建に関する判断の仮説と実際の動き

津波は，そこに住まう人々の生活を一変させる。A地区では一定数の家が残ったとはいえ，家族を失った方も多く，それ以外にも，住む場所，職場，家財道具等，さまざまなかたちで喪失を体験していた。そして，そこからの生活を考える際に，どこで，どのように生活を送るのかが重要となる。

元の住宅が被害を受けた場合，避難所や仮設住宅の次の住まいを，どこかの段階で決めなければならないが，それは本人ひとりの意向だけでは決められない。「持家を再建する」という意向も，実現には資金が必要となる。住宅ローンを組む場合，与信審査の条件を整えなければならない。当然，一緒に住まう者の間での合意も必要となる。さらに，復興土地区画整理事業区域に指定されれば，事業完了後の土地引き渡しまでは，自己所有地であっても自由に家を建てるのは難しい。反対に，全壊判定でも修理可能である場合，比較的安価に，早く自宅を再建することができる。また，非浸水区域に新たに土地を確保できれば，今後の津波のリスクを回避できるような生活再建が早期に可能となる。しかし，元の土地での再建に比べて費用は大きくかさむことになる。

政策の水準では，持家の自主再建を基本型として，それが難しい者（住宅困窮者扱いとなる）のために復興住宅が用意される。復興住宅の建設戸数は必要数によって決定されるため，2012年夏ごろから行政による住宅再建の意向調査がくり返し実施されてきた[10)]。

生活再建の意向，また実際に採りうる選択は，時間の経過，状況の推移によって変化していく。復興計画の発表，住宅再建支援金制度の詳細，土地区画整理事業の完了時期，本人や家族の健康状態などの条件が変わることで，予定を変更しなくてはならない場合もある[11)]。

また，住宅再建にあたっては，再建資金以外に，再建した住宅に継続して住む者がいるか否かという，住宅の継承性も重要となる。A地区周辺では家・土地が十分に商品化されておらず，市場を介した家・土地の取引もさかんではない。家・土地は家族や親族から継承したもの，すべきものという意識が強い場合，不要になったからと

いって簡単に家・土地を売却するという選択は採られにくい。

このことは同時に，A地区内に新たに土地を確保しようとしても，市場外の伝手がなければ，物件の情報すら入手困難であることを意味している。家・土地の取引にあたっては，金銭以外に土地を手放す「意味」が必要とされていた。

A地区の場合，家族・親族から家・土地を継承した旧住民層と，市中心部のベッドタウン的に移り住んできた新住民層という入居経路の違いによって，地域内でのネットワークや地位，地域との関わり方が異なり，金銭以外に調達可能な情報やネットワーク資源も多様である。この調達可能な資源と家の継承性が複合して，住宅再建の道筋を多様なものにしていることが，縦断調査という設計のもと聞き取りを継続するなかで徐々にみえてきた[12)]。

4　聞き取りの記録をいかに作成するか

調査の「表現」としてわれわれにとって重要なのは，毎年の調査報告書である。毎回100ページ程度の報告書を作成し，翌年の聞き取りの折に対象者に配布している。報告書は「調査の概要」「インタビューの概要」「A地区みなさんの声」の三部構成となっている。「調査の概要」は，調査の目的・経緯，調査の方法，A地区および町内会の概要によって構成され，共通の質問項目や，調査協力世帯の内訳，A地区に関係する復興事業の経過等の基本情報を掲載している。また，「インタビューの概要」は，聞き取りをもとに，研究メンバーで主要な論点をまとめたものである。これは調査対象者に対して，生活再建に向けて町内会会員世帯の状況を集約して伝えるものであると同時に，研究メンバーが個々の論点を掘り下げ研究論文にする種となるものでもある。そして，報告書の大半を占める「A地区みなさんの声」は，聞き取りの抜粋で構成されている。

聞き取りの記録の作成にあたっては，文字起こしの内容すべてを報告書に収録するのではなく，抜粋を作成して掲載している。今後の住まいに関するもの，復興事業やまちづくりの意思決定プロセス，コミュニティのあり方に関するもの，その他現在の生活のなかでの思いに関するものなど，比較的共通性の高い論点に関する意見や評価，状況や実感から，抜粋を行ない，論点ごとにまとめるという方法をとっている。それぞれの抜粋は一段落から数段落程度で，掲載数は対象者全員分で毎年数百にのぼる。

「A地区みなさんの声」では，「今後の住まいの展望」，A地区・Z旧村・釜石というまちに関する，まちづくりやコミュニティ関連のトピック「まちについて」，その他生活全般に関する「現在の生活と思い」という大項目を設定，その大項目の下に小項目をたて，小項目の下に個々の抜粋を分類して掲載している。例えば，大項目「今後の住まいの展望」の下には，「町内での自力再建を検討中」「町内で自力再建済み」「ほかの地域での再建を検討中」「ほかの地域で再建済み」「復興住宅に申込済み」「復興住宅に入居済み」「修理して自宅に戻った」「どうするか迷っている」「どの地域に住むか」「住まいをめぐって」といった小項目を配しており，大項目，小項目の構成は各年でできるだけ変更しないようにし，読む者が意見分布の変化を把握しやすいようにしている。

抜粋は一人称の語りのまま掲載しているが，文字起こしをもとに，文章のかたちになるよう，話者の意図を崩さない範囲での再構成を行なっている。その際に，話者や家族の性別情報や続柄など個人特定につながるような情報で，論点上重要性が低いと考えられるものについては，上位カテゴリーに抽象化，一般化（長男→子ども，隣の○○さん→近所の人など）したり，削除したりする措置をとっている。また，話者の情報は，「50代，A地区在住」のように，年齢層と現在の居住地のみを掲載している。この一般化，匿名化処理と話の内容の再構成を行なうことについては，聞き取りの依頼の際に，あらかじめ説明

を行ない,同意を得たうえで実施している。

また,事前に抜粋案と全体の目次案を対象者に確認してもらい,本人による加除修正を受けたうえで,自分の発言として掲載する同意を得られたものだけを報告書に掲載している。個別事情が多く含まれ,個人特定につながる危険が高いが,重要な論点であると考えられるものについても,その際にあわせて掲載の意思確認を行なっている。その場合も,掲載の可否を決定するのはあくまで本人であるとの方針を維持している。

研究グループにとって,この抜粋を含めた報告書はそれ自体が研究成果として完結するものではなく,さらに研究を進めるための基礎資料でもある。そのため,研究論文の執筆を行なう際に,聞き取りの対象者にその都度確認を取るのではなく,報告書に掲載された抜粋については,そこからの引用として論文等に使用できるよう,あらかじめ説明したうえで同意をえている[13)]。

5 調査成果を還元することと地域に関わること

このような報告書を作成するということは,どのようなスタンスやメッセージの表現として機能しうるだろうか。最後に論じることにしたい。

われわれの報告書は翌年の聞き取りの際に,対象者全員に配布しているが,これは調査成果の対象者への直接的還元という意味がある。また,現時点では,一般向けと専門家向けに報告書を2種類つくることはあえて行なっていない。

社会調査の成果をいかに発表するか,社会調査法の教科書をひもといても,それに割かれる分量は決して多くはない。「かならず報告書を作成する」「調査協力者には報告書,またはそのダイジェストを配布する」程度のことは,「調査の社会的還元」として,どの教科書にも書かれている。しかし,誰に向けて,どのような水準の報告書を作成すべきなのかという指針を示してくれるものは多くない。

報告書を対象者に提供するとはいっても,高度な統計的分析の理解や背景となる専門的知識を読解に要する研究報告書を一般読者が読みこなすのは難しい。そのため,一般向けの報告書,ダイジェストが必要とされる。ウェブサイトに一般向け報告書を掲載したり,メディア向けプレスリリースを出したりすることも,今やめずらしいことではない。

そのような趨勢がある一方で,われわれが最初の報告書を届けた際にも,「これまで何人も話を聞きに来たが,報告書を持ってきたのはあなた方がはじめてだ」と話す方がいた。40年以上前に中野卓が批判した「よそから来て,調査をして,帰っていく人々」(中野,1975c:28)は,いまだ健在という状況でもある。

自分の話したことが,その後どう使われたのかわからないという状態よりは,一般向けのダイジェストでも何らかの報告があった方がよい。そのことは確かだが,しかし,調査対象者に提供される一般向けの報告書は,専門家向けとは別物と割り切ってよいのだろうか。一般向けの報告書に研究上の意義はなく,対象者への成果の還元のためだけに作成されるものなのだろうか。これは,調査者にとっての研究の意義と,被調査者にとっての研究の意義のずれをどう扱うべきかという問題でもある。

第一節でも紹介したとおり,釜石市,福井県をフィールドに定めた希望学地域調査では,研究者向けの成果報告だけでなく,現地でのシンポジウム,ワークショップ等も積極的に開催してきた。また,「広報かまいし」に2年間,『福井新聞』に1年間連載を持ち,調査メンバーが交代で,一般向けに研究成果を紹介するという試みも行なってきた[14)]。ここには,同プロジェクトの調査対象へのスタンスがよく現われている。

異なる分野の社会科学系研究者が同じフィールドで調査を進める希望学プロジェクトにおいては,自治体と協力するが,あくまで独立(中立)の立場を取るというスタンスがプロジェクト内

写真 仮設住宅談話室での聞き取りの様子（2017年8月）
右から2人めが石倉，3人めが西野の両著者。

の共通了解としてあった。つまり，行政のための調査ではないという立場，また特定の団体や企業，個人を研究上大きく取りあげることはあっても，その「代弁者」にはならないという立場である。しかし，調査を長く続けていくためには，情報収奪型調査にならないような配慮をする必要がある。そのための試みが一般向けシンポジウムやワークショップであった。そこでの主眼は，情報提供，話題提供だけでなく，参加者からの調査者への評価を聞く機会の確保にもおかれていた。

一方で，昨今は社会科学系の学会などでも，研究の「政策的含意」を問う質問が投げかけられることがある。政策科学を標榜する，あるいはそれに近いスタンスを取るならば，より良い意思決定，合意形成のために，研究者は積極的に介入すべき，あるいは具体的な施策につながるような提言をすべきとなろう。「役に立つ」研究の立場である。研究の詳細が伝わらないなら，わかりやすい「役に立ち方」を示すというのも，ひとつの専門家と非専門家の架橋の仕方であるかもしれない。さまざまな「社会実験」を行なう工学系の研究者であれば，むしろこちらの立場の方が主流であろう。

しかし，政策に直接関与する権限を持たないかぎり，「政策的含意」や「政策提言」はそれを受け取り，「役立てる」誰かに委ねられる不確定なものであり，その意義は事後的にしかわからないはずのものである。また，「役に立つ」は，研究そのものの外にある基準と，その基準に与えられた社会的重要性，自明さにつよく依存するものでもある。そして，「役立つ」はしばしば先取りされ，研究の正当化に使われる。

われわれの調査対象者には，「あなた方の聞き取りには，『傾聴』の側面があり，それだけでもみんなのためになっている」と評される方もいた。しかし，そのような評価の言葉に感謝しつつも，それに全面的に同意することはできなかった。「傾聴」という，聞き取りそれ自体の「役立ち方」を自ら認めることは，調査目的の外部に存在する要素を口実にして，研究成果によっ

て判断，評価されるべき調査の意義を先取りするように感じられたからである。

われわれの聞き取りの報告書は，行政の担当者や議員，町内会，まちづくり協議会などの住民団体にも提供している。しかし，それをどのように「役立てる」かは，あくまで受け取る側の問題で，われわれは自分たちが「役立ち方」や「政策的含意」を先取りしないというスタンスで調査を行なっている。それは同時に，調査対象者の意見を代弁するような立場を取らないことでもある[15]。

現在の被災住民に状況の直接的な改善をもたらすような還元の仕方はできない，しかし，「研究上の意義がある」「記録に残すこと自体に価値がある」とうそぶくことからも距離を取りたい。そのような異なる研究スタンスの間で，どのような調査の設計がありうるのか，どのような還元の仕方がありうるのか，手探りでわれわれは調査を進めてきた。

対象者の語りの抜粋によって報告書を構成すること，語りから論点を整理して見取り図をつくること，抜粋はその後の研究のための基礎資料とすること，同時に報告書は調査対象者自身にとっても読むことができる，また読み応えのあるものを目指すことという方針で，われわれは報告書を作成してきた。それは一般向けの報告書と専門家向けの報告書の接点を探る試みでもあり，また「役に立つ」以外の還元の仕方を探る試みでもあった。

生活再建というわれわれのテーマは，聞き取りの対象者にとっても，アクチュアルかつ切実な話題であるため，研究者と対象者の間で関心が重なるように見えやすく，調査への理解，協力も得られやすい状況にあった。「みんなが何を考えているのか知りたい」「（報告書を読んで）みんな同じ気持ちなんだなと思って安心した」，そのような言葉を聞き取りのなかで幾度となく耳にした。その一方で，通常の調査では当然尋ねられる「なぜこの地域なのか」「なぜ私が対象なのか」という問いは，災害時の調査ではほとんど聞かれない。しかし，これは震災後という状況の特異さの効果であって，そのような調査者と被調査者の「共同」の理想を幻視させるような状況は長くは続かない。自宅を再建したり，復興住宅に入居したりして，住まいの問題が一段落すると，調査者の持つ関心と被調査者の関心は離れていき，「自分はいつまで聞き取りの対象となるのか」と尋ねられるようになる[16]。

報告書の配布が，結果として住民の意識への介入につながったこともある。最初の2回の調査分は聞き取り日程の調整で訪問した際に報告書を配布していた。聞き取りの際に「いただいた報告書のなかでも，そう話している人がいたんですけど」と話す方，事前に渡した報告書を手に，めくりながら質問に答える方などがおり[17]，われわれの配布した報告書が，住民に対して，現状を理解するための枠組をつくってしまっているのではないかと反省し，近年は聞き取り当日に渡すよう変更することになった。

また，今後の報告書の位置づけについても，研究に使う論点を中心に抜き出して報告書に掲載するのか，調査対象者の関心にあわせて，意見の分布が把握しやすいように抜粋するのか，研究メンバー内でも意見の分かれる点である。

住宅再建プロセスが具体化してくると，聞き取りのなかに個別性の高い事情が多く現われるようになる。また，まちづくりの方針，意思決定プロセスをめぐって，住民間の対立が生じることも多い。そのような事情に触れた発言については，できるだけ一般化し，匿名化を行なったとしても，他の調査対象者の目に触れる報告書への掲載を断られることもある。われわれの調査において，報告書の作成，配布は，聞き取りを終えた後の「来年，報告書を持ってまた来ます」という約束でもあるが，長く続けるためにはアレンジメントが必要でもある。われわれも，状況，事情の変化にあわせて，報告書の位置づけを探りなおす時期に来ているとも感じている。

松田素二は，似田貝－中野論争を振り返った論考のなかで，中野卓のスタンスを，調査者と被調査者の間に厳然たる立場の違いが存在することを前提としながら，その違いを超えてさまざまな交歓が行なわれる可能性を見通したものだと整理している（松田，2003：505）。そして，調査者が被調査者の側に「降りて」いき連帯することで，両者の構造的差異を解消しようとする方向でも，また，『文化を書く』（Clifford et al., 1986）以降の「フィールドワークの不可能性」の議論のような，両者の「共約不可能性というシニシズムの袋小路に閉塞する」（松田，2003：509）方向性でもない，理解の可能性につながるものと中野を再評価している。中野の「研究者としての役割関係を軸としてのみ人間としての調査者－被調査者の生活のふれあいがあり，そこに，たがいに教えあうことも協力することも可能となる」（中野，1975b：29-30）という認識から，われわれが学ぶことはいまだ多い。

注

1）古くは，「似田貝－中野論争」（1975）も調査者－被調査者関係をめぐる議論であった。

2）『希望学3』収録の座談会「総括 地域の希望を考える 希望学釜石調査座談会の記録」での竹村祥子の発言（東大社研ほか編，2009b：313）。

3）当時釜石市内に4つあった高校の卒業生に対して，同窓会の協力のもと，高校卒業後の地域移動やライフコースに関する質問紙調査を実施した。調査の成果は東大社研ほか編（2009b）を参照されたい。

4）概要，報告書については，同調査ウェブサイトを参照のこと（http://jww.iss.u-tokyo.ac.jp/survey/fukko-kamaishi/）。

5）成果の一部は『〈持ち場〉の希望学』（東大社研・玄田編，2014）にまとめられている。

6）2000年の鳥取県西部地震以降，住宅再建に対して公的な支援金が支給されるようになったが，しかし一世帯に支給される支援金のみでの住宅再建は極めて困難である。

7）研究メンバーが，震災前の希望学調査や震災直後の聞き取りで，複数のＡ町内会役員の知遇を得ていたことも，交渉において奏功した。

8）2016年夏の時点では約80世帯がＡ地区に戻っている。

9）調査対象は第1回調査が23世帯，新規世帯を加えた第2回，3回調査は44世帯，第4回は39世帯に調査を行なった。第5回調査（2016）では，調査設計を一部変更し，他地域からＡ地区に移り住んできた世帯にも調査を行なった。また，震災前のＡ町内会会員で，聞き取りを行なっていない世帯に2016年2月に質問紙調査を行ない，その回答者の一部を第5回調査の対象に加えている。これに伴い，自宅再建や復興住宅への入居が済んだ一部の世帯は，調査間隔を空けることとした。

10）なお，状況が定まらない2012～2013年ごろは，意向調査に対して「答えられない」との声が多く聞かれた。この段階での「決めること」の困難さについては，石倉（2014）で詳しく論じている。

11）例えば，土地区画整理事業完了後に再建支援金を持ち寄って持家の共同再建を予定していた親子二世帯で，健康上の理由から高齢の親世帯が土地の引き渡しまで仮設住宅に住み続けること，仮設住宅集約に伴う引っ越しに耐えられず，復興住宅に入居するという選択を取ったケースもあった。このケースでは，それに伴って二世帯分の支援金が利用できなくなり，再建計画の見直しを迫られることとなった。

12）住宅再建という選択における，時間と資源，継承性の複合については，西野ほか（2017）で論じている。

13）報告書作成時に一括して同意を取り，そこからの引用として研究論文を執筆する手続きは，労働研究分野のオーラル・ヒストリーでの作法を参考にしている。希望学の成果である中村尚史ほか編（2011）や東大社研ほか編（2014）も，同様の手法，手続きによって作成されている。

14）「希望学」による活動は，同ウェブサイト内「シンポジウム」「希望学連載」を参照されたい（http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope-archive/）。

15）研究者が代弁者にならずとも，当事者自身が発言者になるという方法もありうる。実際，東日本大震災後は，当事者の発言が大量に世に出ること

になった。むしろ，当事者による発信の機会が相対的に増えた現在では，研究者が当事者の代弁者という立場を取ることにこそ，説明が必要であるかもしれない。

16）その場合，自分の住まいの復興から，まちの変化，復興と対象者との関わりに関心を向けたり，聞き取りの間隔を空けたりして，仕切り直すといった対応を行なっている。

17）現代の人類学のフィールドでよく見られる，分厚いエスノグラフィーを手に，研究者の質問に答えるインフォーマントの構図に似た状況である。

文献

Clifford, James and George Marcus eds., 1986, *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press.＝春日直樹ほか訳，1996，『文化を書く』紀伊国屋書店。

玄田有史，2013，「あとがき」東大社研・玄田有史編『希望学 あしたの向こうに――希望の福井，福井の希望』東京大学出版会：423-427。

石倉義博，2009，「地域からの転出と『Uターン』の背景――誰がいつ戻るのか」東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学３希望をつなぐ――釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会：205-236。

――――，2014，「『住まいの選択』をめぐる困難さ」東大社研・中村尚史・玄田有史編『〈持ち場〉の希望学――釜石と震災，もう一つの記憶』東京大学出版会：261-281。

松田素二，2003，「フィールド調査法の窮状を超えて」『社会学評論』53（4）：499-515。

中村尚史・青木宏之・梅崎 修・仁田道夫編，2011，『炎の記憶――釜石製鉄所労働者のオーラルヒストリーⅠ・Ⅱ』東京大学社会科学研究所。

中野 卓，1975a，「歴史社会学と現代社会」『未来』101：2-7。

――――，1975b，「社会学的調査における被調査者との所謂『共同行為』について」『未来』102：28-33。

――――，1975c，「社会学的な調査の方法と調査者・被調査者との関係」『未来』103：28-33。

――――，1975d，「環境と人間についての緊急調査と長期調査」『未来』104：45-8。

――――，1975e，「社会学的調査と『共同行為』」『UP』33：1-6。

似田貝香門，1974，「社会調査の曲がり角――住民運動調査後の覚え書き」『UP』24：1-7。

西野淑美，2009，「釜石市出身者の地域移動とライフコース――釜石を離れる・釜石に戻る」東大社研・玄田有史・中村尚史編『希望学３希望をつなぐ――釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会：163-203。

――――，2014，「『住まいの見通し』はなぜ語りづらいのか」東大社研・中村尚史・玄田有史編『〈持ち場〉の希望学――釜石と震災，もう一つの記憶』東京大学出版会：240-260。

西野淑美・石倉義博・平井太郎・秋田典子，2012-2016，『釜石市Ａ地区町内会の皆様への聞き取り調査 報告書』（第１回から４回）。

――――，2017，「東日本大震災被災世帯の住宅再建判断過程――岩手県釜石市Ａ町内会への質的縦断調査より」『日本都市学会年報』50（印刷中）。

東大社研・玄田有史編，2013，『希望学 あしたの向こうに――希望の福井，福井の希望』東京大学出版会。

東大社研・玄田有史・中村尚史編，2009a，『希望学２希望の再生――釜石の歴史と産業が語るもの』東京大学出版会。

――――編，2009b，『希望学３希望をつなぐ――釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会。

東大社研・中村尚史・玄田有史編，2014，『〈持ち場〉の希望学――釜石と震災，もう一つの記憶』東京大学出版会。

特集論文

3

フィールドワークにおける視覚的表現の活用

社会調査実習の成果と近未来の課題

亀井伸孝
愛知県立大学外国語学部 教授

1 はじめに

本論は，社会調査，とりわけフィールドワークにおける視覚的表現の活用とその効果について，大学における社会調査実習の諸事例に基づいて検討することを目的とする。あわせて，近年のスマートフォンなどに代表される携帯端末機器およびソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下，SNS）の普及がこの分野にもたらしうる甚大な影響について，社会調査教育の側面と，社会調査それ自体の未来の側面の両面において検討する。

社会調査において，スケッチや写真，映像などの視覚的な方法を含めた「表現の多様性」を模索することは，きわめて重要である。それは，調査データの精度を上げ，成果を分かりやすく伝達するという機能面の向上に留まらない。調査協力者との信頼関係を育み，社会調査教育における学生の調査力向上にも寄与するなど，そのメリットは大きい。

一方で，調査と表現をめぐる近年の情報環境の変化にも注目する必要がある。携帯端末機器とSNSの普及は，こうした多様な表現を行う上での利便性を著しく高めた反面，「調査者が倫理を踏まえてデータを収集し，責任をもって表現を行う」という慣行を土台から揺るがす可能性を秘めている。社会調査という概念とその遂行主体のあり方自体が問い直されうる同時代にあって，調査者の役割と望ましい社会調査教育のあり方についても展望したい。

なお，本論の内容は，筆者の勤務大学において，2011～2016年度の6年間にわたって取り組まれた，複数の授業科目および学生課外活動における社会調査実習の事例に基づいている。いずれも現実の事象に基づいているが，固有の人物，集団，時期，科目名称等が特定されないよう，表現に若干の改変を施していることをお断りしておく。

2 アフリカ熱帯雨林での調査におけるスケッチの活用

まず，筆者が社会調査における視覚的表現の有用性をいかに見出し，それを活用していったかの経緯を述べる[1)]。

1996年から1998年にかけて，大学院生であった筆者は，文化人類学的な長期フィールドワークの一環として，中部アフリカのカメルーン共和国の熱帯雨林における狩猟採集社会での調査を行っていた。電気のない集落での長期滞在において，データを記録する方法は，フィールドノートとペン，およびフィルム使用のカメラ1台という，古典的な文化人類学の調査手法であった。

ところが，湿気の多い熱帯雨林での長期滞在の最中に，カメラのフィルムを巻き取る軸が折れてしまい，写真を撮影することができなくなってしまった。写真店のある首都から約900kmも離れた集落において，代替のカメラを入手することは不可能である。カメラなしで何か月も調

表1 社会調査におけるスケッチの有用性

有用性1 対象の正確な理解	スケッチにより対象を正確に理解できる。スケッチの作業を通じてじっくりと対象を観察し， 自分の手でそれを再現するため，よく理解でき，鮮明に記憶に残る。
有用性2 対象の正確な記録	スケッチにより対象を正確に記録できる。 よく観察することに加え，それが明解で有用なデータとしてノートに残る利点がある。
有用性3 ラポールの形成(図1)	スケッチはラポール(信頼関係）を形成する。つまり，現地の人にとても受ける。 目の前の物を即座にスケッチに描き，その場でみんなに見せれば，大笑いしてもらえる。 言語の要らないこの方法で話題をつなぎ，それが緊張の緩和に役立った。
有用性4 資料収集の円滑化	スケッチは資料収集を円滑にする。絵を描いていると，「この人は物を見かけると絵を描く人である」と 認識され，次はこれの絵を描いてみてくれと，子どもたちが珍しい物を見せに来てくれる。新しい物を いろいろと見る機会が得られ，物の名前を教わり，そこからだんだんと現地のことばを覚えていった。
有用性5 データベースの形成	スケッチはデータベースを形成する。スケッチの蓄積は魅力的なデータベースとなり， 後日，現地調査の成果をまとめて公開していくためのアイディアを生み出す源泉となった。
有用性6 表現の明解化	スケッチは表現を明解にする。後日，論文や学会発表で成果を報告するとき，スケッチの記録を もとにした図を用いると，表現が明解になり，多くの読者や聴衆の関心を引くことができる。

亀井（2010）に基づき一部改変。

査地に滞在することは，時間の無駄でもあり，大変困惑した事態に直面していた。

ノートとペンしか残されていなかった筆者が，その後集落に滞在し続ける中で，たまたま見出した方法が，「フィールドノートにスケッチをとること」であった。大学の学部生の時に生物学実習でスケッチの方法を習得していた筆者は，目に映るさまざまな動植物や道具，子どもの遊びや精霊のダンスなど，人びとの生活の風景を次つぎと絵に描いていった。これが現地の人たちの興味を誘い，ことばがほぼ通じない集落においても子どもたちが喜んでスケッチをのぞきに来てくれて，やがて会話も弾むようになった（図）。社会調査において，「絵を描くこと」というきわめてシンプルで文字に頼らない視覚的表現が，さまざまな意味で役に立ったことを実感した。

当時は不勉強ゆえに知らなかったが，フィールドワークの先人たちは，ことばが通じない初めて訪れる調査地において，絵を描くという視覚的表現手法を活用して調査を効果的に実践してきたという逸話がある（たとえば金田一，1931）。筆者が困惑の体験の中で見出したのは，そういった先人たちの手法の再発見であったということができる。

図 スケッチの有用性
スケッチはラポールを形成する。筆者作画，亀井（2010）より引用。

筆者は，このときの体験に基づき，社会調査におけるスケッチの有用性を6点にまとめた（表1）。社会調査と言うと，しばしば「話を聞き，ことばを記録する」ことに重点が置かれがちである。しかし，視覚的表現を併用することによって，観察や記録においても，人間関係の構築や視野の拡充においても，また，後日のデータ整理や研究発表の手法としても，社会調査の幅がきわめて豊かになる。「カメラが故障した」という偶発的なできごとをきっかけに，筆者は視覚的表現の活用に多くの利点を見出したのであった。

3　大学教育における視覚的表現の奨励

後に筆者が大学に勤務するようになってから，さまざまなメリットをもつ視覚的表現を，社会調査教育の中で学生たちとも共有していこうと考えるようになった。

学生たちとレポートや卒業論文の指導などで議論をする時，しばしばことばで文字数を増やすことが重要であるという発想に陥りがちであることに気がついた。図書館で本を探し，大量の引用をもってページを埋めていくというレポートや論文に，筆者は不足を感じていた。むしろ，学生自身が直接見聞した事例を，自分の手でデータとして記録，加工し，作品にしていくという，社会調査の実践を奨励したいと考えた。

一方，携帯電話などの端末機器で，学生たちはよく写真や映像を撮っている。それらは，学術的な調査とは関わりのない，いわば私的な遊びの領域のものだとの認識があるように見受けられた。筆者に言わせれば，自分の手で撮ってきた写真などは，他では得がたい貴重な調査データであると映る。しかし，それらを学術的な論文で活用することについては，これまでに適切な指導もなかったためか，思い至っていない状況に見えた。

こうした状況を見て，筆者は，学生がすでにもっているこれらデータと，学術的な論文などのアウトプットを「結びつける」ことを主眼に，社会調査実習に取り組むこととした。訪問先で見聞して記録してきた写真などは，私的な遊びの素材ではなく，貴重なデータであり，社会調査の成果である。適切な方法に従って加工し，表現すれば，どうどうと論文に掲載することができる。図書館の本から大量引用した借り物の文章よりも，自分で撮影した写真1枚を掲載する方が，どれほど学術的に貴重な貢献となるか。そのような認識を，学生たちと共有することから始めていった。

「こんな写真を学術的な論文に掲載していいのですか？」「かまわない」。社会調査指導を行う筆者の主な役割とは，学生たちがすでに持ち合わせているコンテンツを「社会調査のデータ」と位置づけて追認し，公開のために勇気づけるべく背中を押していくことに他ならなかった。

4　視覚的表現の活用事例——スケッチ，写真，映像

大学における社会調査実習は，毎年のように実施し，学部1年生の初年次基礎教育から，4年生卒業論文，大学院修士・博士論文指導まで，さまざまなレベルで行ってきている。

ここでは，視覚的表現の活用として，スケッチ，写真，映像という三つの手法について紹介する。これらの調査実習の対象は同一の学生たちではなく，必ずしもみなが段階的にすべてを経験するわけではないが，おおむね，難易度の低い方から高い方へと順に説明する。

スケッチ

スケッチは最も簡便な手法であり，筆者の視覚的表現の活用の原点でもある。その実習を，野外で行う（写真1）。

調査前の指導としては，ただ漫然と絵を描くのではなく，「しっかりと観察し，見たものだけを正確に再現する」「輪郭は必ず閉じる」「色は塗らない」「タイトル，観察日時，観察場所，観察者名を必ず明記する」「色やその他の情報を文字で併記する」などの基本姿勢を提示する。その後，公園などで自由にスケッチをとる。せっかくの野外観察体験なので，見るだけでなく，環境音（鳥の鳴き声など），物の匂い（花の香りなど），触感（物体の肌触りや温度など）といった，視覚以外の情報も可能な限り集めて記録してくるという課題をあわせて出すこともある。

スケッチを30分ほど行った後，相互に見せ合って論評する。普段何気なく見過ごしているものの，実はさまざまな刺激が環境にあふれているとい

うことを実感するとともに，紙とペンだけで豊かで正確な記録が残せるという体験をすることができる。

写真

写真の活用には，いくつものアウトプットがあるため,簡便な方から順に紹介する。

(1) 写真（論文作成）

まず，写真を論文作成に活用する方法である。調査前の指導としては，後で論文に使用しやすいよう,簡便な撮影のコツについて説明する。たとえば,「調査協力者に撮影の許可を求める」「不特定多数の人びとを撮るときは,顔が判然と映っていない角度のものを撮っておく」「調査の開始と終了の時に風景写真を撮っておくと，調査時間帯を記録できてよい」などである。

論文で写真を用いる際の指導としては，掲載に当たっての基本的事項を教示する。「写真のトリミングを行って必要な箇所を載せる」「写真に通し番号を付け,タイトル,撮影時期,撮影場所,撮影者名の4点の情報を必ず付ける」「必要なものを厳選して用い，本文中で一度以上は言及する」「他者の作品を無断で用いてはならず，写真提供を受けた場合はキャプションに撮影者名を盛り込む」などである。

(2) 写真（プレゼンテーション）

次に,PowerPointスライドを用いたプレゼンテーションでの写真活用を奨励している。PowerPointのスライド作成については多くの学生が慣れているため，むしろ学術的なデータとして写真が効果的に活きるための撮影，編集の方法を指導する。

調査前の指導は，論文作成の場合と似通っているが,プレゼンテーションの場合は，写真に情報提示の役割を委ねる比重が論文よりも高いため，事後にスライドに文字を多く書き込まなくて済むような撮影のコツを教示する。たとえば,「看板や地図,パンフレットなどの文字情報はなるべく撮っておく」「調査地の全景と細部の両方を撮っておく」「ふたつの対象を比較したい場合は，両方を同じ視点，分量で撮影しておく」「物の大きさを示したいときは,メジャーまたはボールペンなどを含めて撮る」などである。こうした写真を意識的に集めておけば,スライドで文字に頼らずに「写真に語らせる」ことができる。

写真1 公園におけるスケッチ実習
2016年4月，愛知県長久手市，愛・地球博記念公園にて筆者撮影。

事後の指導については,「調査方法のパートにおいて，調査地全景の写真を示す」「比較する場合は写真を並べて示す」など，写真がよりよく活きる配置を提案することがある。また，学生発表でしばしばあることだが,「調査者自身が映り込んだ記念写真のようなものを過剰に用いない」よう注意することがある。学術的なプレゼンテーションは,個人の旅の思い出スライドではないということを明確にする。その他,「撮影時期や場所などの4点の情報の明示」「他者の作品の提供を受けた時の撮影者名の表示」などの指導については,論文作成の時と同様である。

(3) 写真（展示）

写真データのアウトプットのひとつの形式として，学生たちが海外や国内で撮影してきた作品を展示する「旅の写真展」を開催してきた。これは，当初は旅行好きな学生たちの課外活動としての学内展示の取り組みから始まり，やがて単位を伴う社会調査実習や，学外での大規模展示会へと発展していった活動である。

写真2 愛知県立大学国際関係学科「旅の写真展」設営作業
2016年6月，愛知県常滑市，イオンモール常滑にて筆者撮影。

写真3 映像制作の授業における撮影実習風景
2016年12月，愛知県長久手市，愛知県立大学キャンパスにて筆者撮影。

写真の展示が他のアウトプットの形式（論文作成やプレゼンテーション）と異なるのは，文章や語りによって補足説明をすることができず，写真と短いタイトルのみですべてのメッセージを伝える必要があるということである。調査前の指導では，同じ対象について複数枚の写真を撮影しておくよう推奨している。事後にその中から出品作品を選定するが，その際も念入りに時間をかけて議論し，メッセージに適したものを選ぶ。

また，写真のトリミングも重要な工程となる。撮影した写真をそのまま印刷するのではなく，必要に応じて周囲の風景などをカットし，メッセージが明瞭に伝わるように加工する。たとえば，日本の祭りの風景を撮影してきた学生がいるとする。出品者が「伝統」や「歴史」を主題にしたいならば，神輿（みこし）や山車（だし）を中心に，和服姿の参加者たちがより目立つよう，周辺の都市の風景をカットする。一方，出品者が「伝統と現代都市文化との融合・調和」をテーマにしたいのであれば，周囲の信号機や電柱，ビルや自動車もカットせずに，あえて含めて印刷する。メッセージに合わせて静止画を編集し，発信することができるということを，こうした作業を通じて学生たちと共有する。

タイトルについても同様である。タイトルを工夫することによって，見る人の視点を写真の中の特定のポイントへと誘うことができる。たとえば，写真の中に人物と動物が映っている場合，人物と動物のどちらに感情移入して見るかによって，その写真がもたらす意味はまるで異なり，タイトルはその視点の誘導のための強力なツールとなる。

「視覚的表現の分かりやすさ」とは，一面で，見る人の印象をたやすく操作することができる，言い換えれば，人をだます手段にもなりうる危険性をあわせもつことでもある。このことを実習を通じて知ることで，表現者としてのモラルを養うとともに，見る側としても慎重な姿勢で映像や写真を受け止めるというメディア・リテラシーを培う機会とする。

トリミングを行った上で，写真を大型プリンタで印刷し，展示パネルを作成する。また，「タイトル，撮影時期，撮影場所，撮影者名」の4点の情報を盛り込んだプレートを作る。これらの工程は，各自の手作業として行う。また，展示全体のレイアウトについて議論し，たとえば，国・地域別に配列する，「海」「街」「子どもたち」のようにテーマ別に配列するなど，「見せ方を工夫する」ことも課題となる。最後の仕上げとして，2人1組で金槌と釘を用い，展示の設営をする（写真2）。会期終了後は，全員で撤収作業を行う。このように，一定の技術と作業日数を必要とする，大がかりな実習となる。

表2 社会調査実習における視覚的表現の種類と特徴（3種類6形式）

表現手法	アウトプットの形式	調査道具	設備	経費
スケッチ		ノートもしくは紙，ペン	不要	不要
写真	論文作成	デジタルカメラもしくはスマートフォン	編集用のPC，プリンタ	通常のPCとプリンタがあれば不要
	プレゼンテーション	デジタルカメラもしくはスマートフォン	編集用のPC，発表用のプロジェクタ	通常のPCとプロジェクタがあれば不要
	展示	デジタルカメラもしくはスマートフォン	編集用のPC，写真印刷用の大型プリンタ，展示会場，掲示板などの展示設備	大型プリンタ，専用インク，写真専用印刷用紙，発泡スチロールパネル，展示用の釘，工具などの準備が必要
映像	プレゼンテーション	ビデオカメラ，デジタルカメラもしくはスマートフォン	編集用のPC，発表用のプロジェクタ，スピーカ，映像再生ソフトウェア	通常のPCとプロジェクタに加え，スピーカ，場合によって専用ケーブルや端子，メディアの準備が必要
	作品制作およびその二次的利用	ビデオカメラ，デジタルカメラもしくはスマートフォン（＊1）	編集用のPC，映像編集ソフトウェア，上映用のプロジェクタ，スピーカ，映像再生ソフトウェア	ビデオカメラおよび周辺機器（マイク，三脚，バッテリー，ケーブルなど），映像編集ソフトウェア，記録用DVD，映像制作の専門家の招聘謝金などの準備が必要

社会調査実習の経験に基づいて筆者作成（表は右ページに続く）。
＊1 デジタルカメラやスマートフォンで映像を撮影することは機能として可能だが，軽量で安定性がなく，映像作品を制作する上で適切でないなどの理由から，社会調査実習では用いたことがない。

映像

近年では，映像を撮影し，再生することが技術的に容易になってきている。これらの活用についても，実習の中で取り組んでいる。アウトプット別に，ふたつに分類して示す。

（1）映像（プレゼンテーション）

プレゼンテーションにおいて，写真と同様に，短い映像を資料として含めることが珍しくなくなってきている。筆者は社会調査実習の中で本格的なプログラムとして取り組んではいないが，映像を発表に含めることを希望する学生がいた場合は，それを許容している。

映像使用に際して最も強調する点は，「必ず事前に同じ機材で動作確認を行いなさい」という点である。映像は保存形式や再生ソフトウェア，PC機種などの制約が大きく，発表本番で再生できないという失敗が生じる可能性が写真に比べて著しく高い。また，映像の場合は動画と音声の両方の出力が必要であるが，機材の準備不足でどちらかが欠けてしまうこともしばしばである。このため，同じ環境での事前動作確認は不可欠であると指導する。

とくに，調査地で撮った映像を見せたいと，発表の当日にデータの入ったスマートフォンあるいはSDカードのみを持参したり，自身のFacebookアカウントに接続して過去にアップロードした映像を再生したいという希望を述べたりする者がいた場合は，厳しく注意する。接続ケーブルや特定の端子，メディアの準備，あるいはインターネット接続ができるかどうかの確認作業をせずに，友人どうしで見せ合う感覚でいきなり提案しても，不具合が生じる可能性が高く，聴衆や主催者に多大な迷惑をかける。プレゼンテーションで映像を使いたいという意欲は買うものの，それなりの知識と準備を伴わねばならないと指導する。

また，撮影者としての提示したい欲求に比べて，視聴する側の関心は一般的にさほど高くない。写真と異なり，映像は再生時間の拘束を伴う。焦点のしぼられていない冗長な映像を流すことは，発表時間の浪費となるだけでなく，視聴者の関心を削ぐことにもなりかねない。「必要最低限の部分にしぼり，冗長な映像再生をしないこと」を強調している。また，必要に応じて字幕を付けたり，映像再生前後のスライドで文字による補足説明をしたり，聴衆に分かりやすい方

表2の続き

指導内容	教員の資質	期間	難易度（＊2）
簡易な説明	調査経験者であれば指導可能	1コマで指導可能	易
簡易な説明	調査経験者であれば指導可能	1コマで指導可能	易
簡易な説明	調査経験者であれば指導可能	1コマで指導可能	易
写真専用印刷用紙への印刷，パネル作成，展示企画，設営と撤収のための実技指導が必要	指導者には，パネル作成，展示実技などの特別な技能が必要	数コマを必要とする(写真の選定，印刷，パネル作成，展示企画，設営，撤収まで)	やや難
プレゼンテーション方法をめぐる説明の他，事前動作確認をさせることが必要	指導者には，映像の形式に関する知識，映像再生ソフトウェア，接続ケーブルや端子，メディア，スピーカなどの設備を整える技能が必要	プレゼンテーションでの表現については1コマで指導可能だが，設備の準備や事前動作確認に時間を必要とする	やや難
企画・撮影・編集などのための長期間にわたる実技指導が必要	指導者には，企画・撮影・編集・上映などのすべての工程にわたる高度な知識，技能が必要	半期または通年の授業を必要とする（企画・撮影・編集・最終上映会の開催まで）	難

＊2 難易度は，必要な設備・経費・教員の資質・期間などを全体的に考慮して評価しているが，教員や設備状況によって変わりうる。

法を工夫することを求めることもある。

なお，本論では詳述しないものの，一般公開の発表においては，視聴覚障害をもつ参加者が含まれる場合がある。参加者の個別のニーズに合わせて，映像部分についても文字原稿を用意したり，必要な補足資料を用意して提供したり，さまざまな対応が必要である。

「映像は手軽でおもしろい」というイメージに反して，発表者には周到な準備と参加者対応が必要であるという点を強調しておきたい。

(2) 映像（作品制作およびその二次的利用）

視覚的表現を活用した実習の中で，最も手間と費用と時間がかかり，技術と設備を要するものは，映像作品の制作である。半期ないし通年の長い実習時間を必要とするが，その分，最終上映時の達成感も大きい。

指導としては，企画の立て方，肖像権と著作権をめぐる倫理から始まり，撮影の実習，事前調査，実際の撮影活動，企画の修正，映像編集の実習，長期の編集作業，字幕付与，追加撮影，試写と論評，修正編集，最終上映会の開催まで，多くの内容を必要とする。こうしたことを指導できる人材も限られるため，筆者の勤務大学では，とくに撮影と編集の実習を中心に，高いスキルをそなえたゲスト講師を招聘し，よりよい教育効果をねらっている（写真3）。

なお，映像を用いた他のアウトプットとして，「論文作成」および「展示」での活用がある。これらは，いずれも映像作品の二次的利用という形をとる。たとえば，論文の資料として，関連データを編集した映像作品のDVDを添付するという事例があった。また，写真展と同様，企画展示において，会場にノートPCやスクリーンなどの上映機材を持ち込み，調査の成果を映像作品上映という形で表現する事例もあった。これらは，いずれも万人向けということではなく，とりわけ映像を用いることに強い関心と必要性をもった者が選択肢として行うことであり，そのための特定の指導プログラムを整えているわけではない。

5　視覚的表現の比較と達成

以上で示した，実際に筆者が社会調査実習の中で活用してきた視覚的表現（3種類6形式）について，その特徴を表2にまとめた。

最も簡便なスケッチ実習は，春の暖かい陽気の中で，お花見を兼ねて行える程度の楽なものである。一方の映像制作実習は，大がかりな設備と技術，機材を必要とし，外部ゲストを招聘して行うという，手間のかかるものである。すべてに共通するのは，自ら調査地を訪れ，体験を通じて視覚的情報を集めること，そして，それらを学術的な価値をもつデータの形式を伴わせて開示することである。

これらを一通り経験する学生もいれば，どれかひとつを履修，あるいは課外活動として経験する学生もいる。必ずしも段階的な履修を想定しているわけではなく，オプションとしてこれらが対象を変えながら随時実施されている。

社会調査における視覚的表現の技法の習得を体系化することを考えるならば，これらを効果的に組み合わせた「視覚的表現の調査法カリキュラム」が構想されてもよいかもしれない。現時点では，複数の調査法の中から学生たちが必要なものを選択し，それを望むならば各自の卒業研究に自由に役立てることができるというスタイルを採っている。

これらの教育実践の効果については，以下のような達成が見られた。卒業論文で文献調査を想定していたものの，思い切って海外調査に出かけることにした学生，海外や国内のフィールドワークで写真を多く活用した論文を作成した学生，調査地で映像を撮影し，DVD映像作品を資料として添付した卒業論文を提出した学生などが現れている。この他，映像制作実習で調査協力者とのアポを取ってインタビューを実施した経験から，学外での調査に自信を深め，インタビューや質問紙も含めた多様な社会調査に自ら乗り出し，フットワーク軽く世界に飛び立つ学生たちが現れ始めた。

研究とは「図書館で本を探し，他人の文献に頼って文字を埋めていく」ことであるといった，文字中心の固定観念を外し，自ら世界を体感して学術的な成果につなげていくことが，珍しいことでなくなってきた。その実践の中核的な技法として，視覚的表現の活用がたえず奨励されてきた。少なくとも，学生たちにおける研究の選択肢の拡充には，一定程度成功したと言えるであろう。

6 情報端末機器とSNSがもたらす課題

本論の後半では，このような形で「自ら情報を集め，視覚的表現として開示する」ことを中心に据えた社会調査教育が軌道に乗ったかに見えた矢先に，筆者が経験した，ある種の指導に失敗しかけた事例を示す。このことは，ひとえに社会調査の倫理教育のあり方を見直すだけでなく，社会調査という営みそのものに一石を投じるかもしれない重要な論点であると考えている。

学生たちとの会話

ある社会調査実習において，写真撮影に関する事前指導を行いつつ，レポートにおける写真の使用を奨励した。調査が終了した後に，レポート作成作業の中で，学生たちとの間でこのような会話があった。

筆者「レポートには，文章だけでなく，現地で撮った写真をどんどん盛り込んだらいいからね。写真も立派な調査の成果なんだから」
学生「はい，みんなで撮った写真をLINEで共有しています」
筆者「……え，それは，だれが撮ったの？」
学生「行ったみんなです」
筆者「……あ，それはまずいな」
学生「え？」
（会話内容の趣旨を曲げない範囲で，ことば使いなどの改変を行っている）

LINEなどのSNSをあまり活用していない筆者にとって，「現地調査で写真を撮り，事後にそれを用いるのは，調査者本人のみである」とい

うことは，ほぼ自明の前提であった。しかし，その前提は必ずしも共有されていなかった。

中高生の頃からスマートフォンを駆使し，常時オンラインでつながりあっている状態に慣れている学生たちにおいて，経験したことを即時にSNSを通じて仲間内で共有することは，日常的な行動様式となっていた。それは，社会調査実習の経験の中でも同様であるらしかった。SNSで共有された写真や映像を含む情報の集積は，そのグループを構成するメンバーたちの共有財となっており，「だれが撮り」「だれの許可を踏まえて」「だれが何の目的で用いるか」が問われない，小さなコモンズのごとき状況となっていた。しかも，共有や利用において，罪悪感ややましさは感じられなかった。むしろ，なぜそれがいけないことなのかの説明を必要とする状況であることを，筆者は遅まきながら認識したのである。

私たちは社会調査において，ふたつの権利の形式とともに，調査者の名義を重んじてきた。ひとつ目は，著作者人格権である。作品における著作者固有の名義を主張し，作品の改変を拒むことができる，他者には譲渡できない権利である。もうひとつは著作権であり，こちらは他者に譲渡することもできるが，（商品価値が生じるかどうかは別として）その作品の使用の可否を決めることができる権利である。

このような，調査者個人を守り，同時に調査行為とその成果に固有名とともに責任を伴わせる「個人の壁」は，SNSという情報のプールの中で限りなく薄れていき，すべてが「みんなで撮った写真」の中に溶解してしまっている。

筆者は，ある意味で社会調査は「学生が手軽に行えるもの」でよいと考えてきた。スマートフォンを活用して得た身近なコンテンツを学術の素材として活用することは，学生の調査力の幅を広げることに資すると考えてきた。その見方自体は今も揺らいでいないが，指導する側が想像していなかったような「情報操作の手軽さがもたらす罠」の存在に気が付いた。社会調査指導がうまくいっていると錯覚してきた，自身の慢心を諌められたような思いがした。

教員としての対応
――「個人の壁」の規範を守る

実は，筆者はいくつかの社会調査実習の中で，似たような事例を複数回経験した。「みんなでデータをごちゃまぜに共有してしまっていいのか」。筆者はこの問いに対して，ふたつの役割を念頭に考察を重ねてきた。ひとつ目は，社会調査実習を授業として実施し，適切な規範を示すという「教員としての立場」である。

SNSの仲間内で共有された情報のプールから，適当に必要な写真をダウンロードして，レポートなどの作品に用いる。提供した側はほんの軽い協力のつもりかもしれず，また，利用した側は軽い引用のつもりだったかもしれない。しかし，そこに垣間見えるのは，「自分自身が現地で撮影して表現する」という一連の行為に伴う責任の軽視である。必要に応じて無料素材をウェブでダウンロードしてブログを飾るのと同じような感覚で，他人の素材でレポートを構成することが常態化してしまうとすれば，どうであろうか。社会調査教育の倫理として，こうしたことは剽窃に匹敵する不適切な行為であると厳しく指導する必要があるだろう。匿名性の高いWikipediaからの引用，ウェブ上の文章の盗用と同じように，著作者人格権および著作権を軽視して，自分の作品に他人の成果物を言及なく混ぜ込むことをしてはならないという観点に立って，教育に臨む必要がある。

SNSでの写真共有という事態を想定していなかった筆者は，フィールドワーク実施後にそのような事態が横行していることを知り，レポート作成上の注意として追加指導を行った。すなわち，「自分自身が現地で撮影した写真を用いることを原則とする」「他人が撮影した写真の使用を希望する場合は，必ず撮影者本人の許諾

を得る」「写真提供者の名前を明示する」といった各点を強調し，適切な引用のスタイルを取らなかった場合は，写真の使用者のみならず，安易に写真を提供した側に対しても厳しい評価を下すと警告した。

その結果，LINEにあふれた「みんなで撮った写真」が複数のレポートに蔓延するといった事態は避けられ，執筆者本人が撮影した写真を「筆者撮影」というキャプションとともに用いる事例が散見されるに留まった。社会調査教育を担当する教員としては，まずは原則的立場に関する指導がゆき届いたことに胸をなで下ろした。

まとめれば，社会調査教育担当の教員の立場としては，従来型の「『調査者個人の壁』を確立すること」の指導に徹したと言える。SNSの情報のプールが出現している現状においても，なお個人の権利と責任の重要性を説き，それを遵守させるという指導を行ってきた。

研究者としての検討
――「個人の壁」のもろさを見据え始める

一方，ふたつ目の役割として，社会調査を自ら実践して知識・情報の蓄積に努める「研究者としての立場」においても，筆者はこの事態を反芻しながら受け止めてきた。教員としての立場とは異なり，社会調査とはそもそも何であり，今後どうあるべきかについて，根源的に考察することができる。

社会調査とは何か。とりあえずここでは「人間社会のある特徴を，特定の科学的手法によるデータの収集に基づいて，客観的に明らかにする作業」と考えておく。量的，質的，さまざまな調査手法があり，明らかにされる特徴も無数に存在するが，「データを収集すること」「客観的に特徴を明らかにすること」についてはすべての社会調査に共通しているものと考えられる。

通常は，この社会調査作業を，人間が行ってきた。質問紙，インタビュー，フィールドワーク，さまざまな調査手法が開発され，その技法を使いこなす専門的な訓練を受けた社会調査者によってデータが収集され，社会の特徴が記述されてきた。調査手法の専門性を身に付けるには年月と経験が必要であり，また調査の実施と成果のとりまとめには時間と労力を伴う。これらの経験に対する敬意を刻印し，また調査行為と成果に対する責任を明確化する意味で，調査者個人の名義は調査と不可分のものとしてあり続けた。これが，従来型である。

一方で，近年のウェブを中心とした情報収集の態勢は，この「人間中心の社会調査観」を揺るがしつつあると言ってよい。GoogleやFacebook, Amazonなどの多国籍企業が世界で展開する各種サービスは，特定のアルゴリズムに基づいて個人ユーザの膨大な情報を収集している。文字のみならず，写真や動画，音声を含み，交友関係や位置情報，社会階層や消費傾向までをも捕捉して，ビッグデータを構築し続けている。ウェブの個人ユーザは，これらサービスを無料で利用できているかに見えて，一面では，現実社会のさまざまな事象を携帯端末機器を用いて取材し，ビッグデータ構築のためにデータを日夜差し出し続けている情報提供者（インフォーマント）でもある[2)]。

「社会調査は，専門性をそなえた人間が行うもの」という（古い？）前提に立てば，筆者が教員として強調してきた，調査者個人としての名義と権利を守ることは欠かせない。一方，大胆にもその前提をあきらめてしまい，「社会調査はアルゴリズムが行うものであり，人間はビッグデータの構築に資するインフォーマントにすぎない」という前提に立つとすれば，どうであろうか。だれが提供したか分からない匿名性の高いデータが横行し，人間はだれも調査の責任を負わない，分類と表示はアルゴリズムが勝手にやってくれて，だれもが自由に無料でデータを使うことができる，信憑性は不明だが擬似的な現実を世界のどこからでも検索することができる。そんな社会調査のユートピア（ディストピアかもしれない）

の到来が予見できる。

研究者としての立場における筆者のまなざしは，教員のそれとは異なっている。ビッグデータの前における人間の無力さを見つめ，現実の趨勢をなかばあきらめとともに受け入れながら，「100年後，私たちはどのような社会調査をもっているだろうか」「その時に，人間が果たしうる役割とは何か」をぼんやりと想像している。

社会調査における身体性の回復

ウェブのビッグデータと，その検索結果がもたらす疑似現実の到来の波は，おそらく今後とも押しとどめようがないであろう。そもそも，学生たちがSNSを用いて行おうとしていたらしいこと，つまり「みんなで写真を共有して，レポートをそれらしい見栄えで飾ること」自体が，撮影者と作品の固有名性や責任主体を抹消し，擬似的な現実（それらしく見える作品）を構成することであった。スマートフォンの中で小さく行われようとしていたことは，ある意味で，実際にウェブ上で進行していることのひな形であり，また近未来の先取りでもあったに違いない。

こうした状況の中で，私たち人間は社会調査に対して何を提言し，構想し，実践することができるであろうか。基本は，ビッグデータを敵視するのではなく，さりとて迎合するのでもなく，多少は抗いながら規範を守り，教えつつ，今後人間にこそできることを構想することが望ましい。

ひとつの提言として，筆者は「社会調査における身体性の回復」を展望したい。「社会調査の原点は『自分の身体を用い，五感を活用して情報を得ること』である」という点を確認し，教育，研究，調査実践の中でもたえずそこに立ち返ることである。

先にも述べたように，筆者の社会調査における視覚的表現の活用は，カメルーンの熱帯雨林における狩猟採集社会調査の中で「手描きのスケッチ」という形で始まった。そのきっかけは，持参していたカメラが故障したという珍事に始まっていた。機械に頼れない，自分の五感を活用する以外の手段を断たれてしまった人間としての筆者は，「目で見て，手で描く」という身体活用の原点に立ち返って，森に暮らす人びとの世界のすべてを写し取り，学び，それをもとに以後の調査を構想していった。

また，現実のビッグデータにおける特徴として，視覚と聴覚のデータは電子的に加工されて膨大に蓄積されてきているものの，味覚，嗅覚，触覚などの物理的・化学的特性に関する情報は，電子的処理になじまないためにきわめて乏しいものとなっている。とくに，フィールドワークなどの直接経験を重視する社会調査において，「食べて味わい，物のにおいを嗅ぎ，触ってみる」ことは，他では得がたい重要なデータをもたらすこととなる[3)]。

多くのことがらを，ウェブ上の疑似現実によって調べ，理解したつもりになれてしまう状況の中で，人間にできることとは，「自身の身体を十全に活用し，だれのためでもない，自らの知りたいことを知る」ことである。それを普段から経験しておくことには，以下のメリットがある。

第一に，情報端末機器への依存ができない時（たとえば停電や故障）も含めて，知的生産手段を自ら確保できる。第二に，現状のビッグデータが得意としない領域（味覚や嗅覚，触覚の情報）に直接アクセスし，表現することができる。第三に，ビッグデータがいずれは触覚や味覚も含めて人間の五感を網羅する情報収集装置となる可能性があるが，その状況においてすら，人間の身体にしか行えない調査手法や対象を見出す創造性に開かれている。

いかにビッグデータが人間生活をカバーしようとしたところで，そのアルゴリズムは結局人間たちが設計しているのであり，その原形は，人間の身体が世界を知覚する方法にある。人間の身体から発する調査手法と対象は，とりあえずはビッグデータが不得意とする情報を捕捉することに貢献し，やがては新しいアルゴリズムの開発

へとつながり，そしてまた次なる「知りたいこと」「それを知る方法」を生み出していくであろう。人間の身体が知りたいと思うことには際限がなく，その関心とともに，社会調査は永続的に身体とともにあるであろう。

個人の身体が調査行為を実践し続ける以上，調査者の固有名はたえず身体およびその行為とともにある。ウェブが万能酸のようにすべてを溶け込ませていってしまうかに見えて，その実，調査者個人という責任主体は，おそらく将来にわたって消滅することがない。「個人の壁」は，絶えず生まれ続ける。ビッグデータがもたらす近未来の憂鬱さの中で，少しばかりの楽観的な見通しを行うとするならば，その鍵は個人の身体の活用にあると考える。

7 おわりに ――社会調査の複数性のために

社会調査実習の経験を振り返りつつ，その中でのSNS使用の問題に着目して，社会調査の未来とビッグデータがもたらしうる影響，その中における人間による調査力の可能性について検討した。

原則的方針は，「社会調査の複数性の確保」である。「この方法でしか物事を知りえない」というふうに，人間の身体の調査力を低く留め置くことは，創造性を減殺することになる。一方，知りたいことに対する複数のアプローチをそなえておくこと（しかも，できれば電気も機器も必要でない手法をも含めて）は，人間が「知る」という根源的な活動を永続させるに当たり，その機会の幅を今後とも広げることであろう。

手描きのスケッチ実習から始め，花の香りを嗅いで紙に記録するという社会調査の原点は，ウェブの存在に圧倒されそうな社会調査の近未来においてなお，人間の身体の調査力の可能性を指し示す，ささやかな抗いのひとつでもあるだろうと考えている。

【謝辞】本論は，愛知県立大学における複数の社会調査実習の経験に基づいて執筆された。有意義な調査をともに行ってきた学生のみなさん，同僚教員の各位に謝辞を贈りたい。映像制作実習の成果については，桃山学院大学（大阪府）との合同教育実践に負うところが大きい。調査実習は，愛知県立大学教育・研究活性化推進費事業の助成を受けて行われた。さらに，公益信託澁澤民族学振興基金民族学振興プロジェクト助成に基づく議論が本論の背景を成している。

文献

亀井伸孝，2005，「フィールドで絵を描こう――社会調査のためのスケッチ・リテラシー」『先端社会研究』（関西学院大学21世紀COEプログラム）2：95-125。

――――，2010，『森の小さな〈ハンター〉たち――狩猟採集民の子どもの民族誌』京都大学学術出版会。

金田一京助，1931，「片言をいうまで」『科学画報』（藤本英夫編，2004，『ユーカラの人びと――金田一京助の世界1』平凡社：10-19に再録）。

注

1）本節の内容は，すでに拙著において詳述した（初出：亀井，2005；加筆して亀井，2010に再録）。

2）かつて，「コンピュータ（computer，「計算手」）」という語は，あるプロジェクトのもと，手作業で計算を行う人間たちのことを指していた。やがて電子計算機が発明され，下請けの計算作業は機械が行うようになり，「コンピュータ」はその機械の名称となった。今日では，機械と人間の立場が逆転し，機械の側がデータ収集の主体となって，人間たちは再びデータを提供する下請けの立場（コンピュータ）に舞い戻った。ビッグデータの出現と社会調査の今日的変容は，このような立場と語義の変遷を想起させる。

3）触覚データの電子的処理については，3Dスキャナ／プリンタなどの開発・普及によって，身近なテクノロジーとなる可能性がある。一方，味覚と嗅覚は，化学的な物質の組成を伴うだけに，その電子的な処理は相当に困難であろうと考えられる。

特集論文 4

調査と表現をつなぐ時間
記録文学と歴史的民族誌の方法的検討

青木 深
東京女子大学現代教養学部 講師

1 調査にはらまれる多元的な時間

私は，戦後日本の米軍基地における人的・文化的な接触の諸相を歴史人類学的に研究している。調査の過程では，当該時期の出版物，後年の回想録，インタビュー，私宅で保管されてきた写真や日記など，質的に異なる資料との対面を繰り返す。そこでしばしば浮上するのが，「私の研究対象は誰／何のどのような時間なのか」という疑問である。

過去を回想する話し手にとっては，聞き手を前にして言葉を発する「現在」があり，思い出される当時の出来事があり，そして忘れられた膨大な時間がある。文書，写真，描画や版画，遺物や遺跡といったモノにさえ，それぞれが経てきた時間が堆積している。物質的資料はまた，言葉や被写体を探しながら記録を残した人びとや，それを整理し保管してきた人びとの経験的時間に取り巻かれてもいる[1)]。すなわち，私の研究対象となっている時間は，歴史的な意味では占領期からポスト占領期（1945年から50年代後半）にあたるのだが，調査過程で出会う多様な資料には，時代区分には還元しえない経験的時間が重層的に沈殿している。

調査対象にはらまれるこのような時間の多元性にどう対処するかという問題は，とくに歴史的視点を含む社会調査においては，多くの調査者が直面するひとつの論点と思われる。その一方で，調査それ自体が多様な時間からなることは，本特集のほとんどの読者が共有する認識でもあるだろう。情報を探し求めて大量のデータを渉猟していく時間，初めての調査地に向かって移動する時間，アポイントをとるときの緊張した時間，新しい発見に昂奮する時間など，それぞれの差異を消去し，すべてを調査経験として一元化することは難しい。歴史研究を含め，広い意味での「人間社会に関する調査」は，調査の対象と主体の双方における多様な時間が複層的に絡み合うプロセスでもある。

調査という営為がはらむこのように多元的な時間を著作物に反映するとすれば，どのような表現上の工夫がありうるのだろうか。本稿ではこの問題について，ともに1970年代におこなわれた調査にもとづいてはいるが，歴史的・社会的文脈は異質な二作品を素材として考えたい。すなわち，戦中の東京で撮影された家族写真をもとにした記録文学『一銭五厘たちの横丁』（児玉，1975；児玉・桑原，2000）と，南米スリナムをフィールドとする歴史的民族誌『ファースト・タイム』（Price, 2002）とを取り上げ，両書にみる時間のありかたを考察する。それを通して，調査において輻輳（ふくそう）する多元的な時間を表現につなぐ方法の可能性を示したい[2)]。

2 「氏名不詳」の調査と表現 ――『一銭五厘たちの横丁』を読む

「昭和十八年，出征軍人留守家族記念写真。撮

影場所東京下谷区車坂町，稲荷町，竜泉寺町，練塀東，谷中清水町。氏名不詳」[3]（児玉・桑原，2000：3）。

東京大空襲で焼けたという質屋の蔵の2階に，このように書かれたネガ袋が残っていた。ネガは，アマチュアの写真家だった桑原甲子雄（のちに著名な写真家となる）が在郷軍人会の案内で「出征軍人留守家族」を撮影したもので，現像すると99枚あった。戦地に送ることを目的としたその日の撮影には，桑原を含めて50数名の「写真家」が参加したといわれる（児玉・桑原，2000：3-4）。それから約30年後にあたる1973年秋から74年秋にかけて，桑原の手元にあったそのネガ袋を託された児玉隆也（週刊誌等で活躍したルポライター）[4]は，撮影現場――現在の地名でいえば台東区の三ノ輪や竜泉の露地，池之端の住宅地――を訪れ，写された「氏名不詳」の人びとを探し歩いた。『一銭五厘たちの横丁』は，その探訪の過程を語った記録文学である（写真1）。

手がかりは「偶然写っている暖簾の屋号や八手の陰の用水桶の名や門柱のいたずら書き」（児玉・桑原，2000：6）程度という状態で取材をはじめた児玉は，少しずつ「氏名不詳」の人物，あるいは彼／彼女を記憶する人びとに対面していった。しかし，最終的に「氏名不詳」のままでおわった写真を数えると，99枚のうちの64枚にのぼる。とりわけ，竜泉小学校（現竜泉こどもクラブ）の校庭で撮影された人びとの氏名は，「不詳」のままで残った。児玉は，「まるで，神隠しだ」と何度かつぶやいた，と書く（児玉・桑原，2000：6）。

1943年の夏，「“百分の一秒”のシャッター」（児玉・桑原，2000：247）が99回おろされた。そのネガが生き残り，それを約30年後に現像することで，記録された人物や建物の画像がたちあらわれてきた。ところが，彼／彼女たちに関わる記憶の多くはその町から消えていた。こうした取材の帰結は，「氏名不詳」というネガ袋の文字や，繰り返される「神隠し」の比喩（児玉・桑原，

写真1『一銭五厘たちの横丁』

2000：44,49,57,161,164）とあいまって，読者の脳裏に茫漠とした浮遊感を呼び起こす。「留守家族記念写真」が撮られた町で暮らす人びとは，出征や空襲で亡くなり，戦後30年の暮らしのなかで町を離れ，死亡し，忘れられていった。児玉はこの離別や忘却の戦後史を，読点を多用する余白の多い文体と，次に述べるようなある情報の欠落を通して表現する。

児玉は取材の様子を記述しながら，出征，戦死，勲章授与など，戦争に関わる個人の記憶や記録をその年月や日付とともに書き記す。しかし，それを聞き知った取材の日付についてはいかなる情報も与えない。「蝋燭屋の佐藤さん」「麹屋の長谷川さん」「金具屋の新谷さん」「指物師の川口さん」「泡盛屋の亀島さん」「下駄屋の山崎さん」「ポンプ屋の橋本さん」ほか，取材した人びとの発話をさまざまな形式で挿入していく[5]。ところが，単行本にして170ページ，文庫にして250ページにわたる探訪の過程で，それぞれの人びとと何月何日に会って言葉を交わしたのか，まったくわからないままでおわる。

児玉が他の作品でも取材日をあまり明記していないことを考慮すると（児玉，2001），『一銭五

厘たちの横丁』もそうした彼の文体があらわれただけで，特別の意図はなかったのかもしれない[6]。しかし，字数等に制限のある雑誌記事ではなく書き下ろしの同書で，しかも全編が探訪記であるにもかかわらず取材の日付が表面化しないのは，すぐれて特徴的な表現形式といわねばならない[7]。「氏名不詳」の写真に対するこうした「取材日不詳」に気付くと，読者は，調査をした時間もまた「神隠し」にあったかのような印象を拭い去ることができない。

表現面における「神隠し」は日付の問題にとどまらない。「あとがき」で児玉は，取材には彼以外に二人の「若い友人」が協力し，文中の「私」とは「三人の総称」だと明かしているからだ[8]（児玉・桑原，2000：249）。取材記者が集めたデータをアンカーがまとめる形式は当時の雑誌記事で一般的だったとはいえ，調査主体の複数性というこの情報を最後に与えられた読者は，本文におけるどの「私」が児玉本人なのかわからない状態におかれる。このような種明かしは「取材日不詳」という事態と呼応し，写真の人びとだけでなく，著者をも含めた同書全体を「神隠し」にあわせる。「取材日不詳」の記述を貫き，「私」の複数性を最後に明かす構図は，資料と調査がたどった「氏名不詳」という現実をただ説明するのではなく，それを表現のありかたに反映させる効果的な仕掛けとして働いている。

「不詳」そのものを表現する同書の特徴としてもう一点指摘しておきたいのは，曖昧な記憶の扱いについてである。「氏名不詳」の人びとを訪ね歩く過程では，写真の人物を思い出す者の間で記憶が一致しないことがたびたびあり，児玉はそうした不一致を積極的に書き留める。

たとえば，長い白鬚（ひげ）の老人とその妻は，「およしさん」や「橋本さん」によれば，長屋の二階に住んでいた易者だった（児玉・桑原，2000：50-56）。しかし，留守家族の家を案内した「藤川永三郎さん」の夫妻は，同じ写真の老夫妻を「日本画の池上先生じゃないかなあ」という（児玉・桑原，2000：131）。あるいは，長靴を履いた男性の家族写真は，出征兵士を送るときにラッパを吹いていた「阿部寅松さん」の一家だという人びともいれば，「小学校の小使いの鈴木さん」だという人もいた（児玉・桑原，2000：10-11，196-200）。児玉は，「理由は省くが阿部寅松さんは小使いの『鈴木さん』に違いない」（児玉・桑原，2000：200）と述べながらも，「阿部寅松さん」の記憶をも丁寧に記述する。

白鬚の老人が「池上先生」ではなく，長靴の男性が「阿部寅松さん」ではないとしても，「池上先生」や「阿部寅松さん」がその町で暮らした時間はあったのだろう。またその記憶が「間違って」いたとしても，そう回想した人びとが「池上先生」や「阿部寅松さん」と関わりながら暮らした時間もあったはずだ。児玉の記述は，「事実」には回収しえない経験的時間を，不明瞭なまま浮かび上がらせる。ここに，「氏名不詳」という現実をもまるごと受け入れる表現を求めた，記録文学における児玉の方法論があらわれている。

3　「聞き取り」と「読み取り」の時間——『ファースト・タイム』から考える

『一銭五厘たちの横丁』が意図せずに「不詳」になった人びとを描いたとすれば，次にとりあげる作品は，意図して「不詳」にされてきた歴史に取り組んだ民族誌である。

リチャード・プライス[9]は，1983年に初版を発表した『ファースト・タイム』（写真2）において，スリナム共和国の密林地帯で暮らすマルーン（南アメリカの逃亡奴隷とその子孫の共同体）の一部族，「サラマカ Saramaka」が秘め伝えてきた過去を探訪する。サラマカの祖先は南米オランダ植民地のアフリカ系奴隷だが，密林への逃亡を繰り返し，討伐軍との闘いを繰り広げ1762年に自由を獲得した[10]（Price, 2002: 1）。『ファースト・タイム』は，彼らがどのように逃亡し，どのように戦って勝利と和平をえたのか，まさにその「はじまりのとき」を語る。

プライスは1960年代半ばにサラマカのフィールドワークを開始したが，当初は「ファースト・タイム」の知識にふれることを禁じられていた（Price, 2002: 14）。「ファースト・タイム」の知識は外部に漏れ出すことがあってはならず，サラマカのなかでもその知識をもつ人びとは限られていた。学ぶ意欲のある若者は，年長の「歴史家」たちに忍耐強く教えを乞い，歌，祈り，ことわざなどの形式に秘められてきた断片を聞き出しながら，みずから知識を組み立てる（Price, 2002: 6-11, 59）。プライスは，最初の調査から約10年後の1970年代半ば，知識の消失を危惧するサラマカの歴史家たちにも認められて，彼らの逃亡と戦いの歴史を学びはじめた（Price, 2002: 14-21）。

こうして出版に至った同書は次のような構成をとる。はじめにサラマカ社会と「ファースト・タイム」に関する民族誌的知識を提示し，隠されてきた歴史の出版をめぐる倫理的問題を論じる（Price, 2002: 3-30）。続けてサラマカの歴史家たちを紹介し，「出来事（The Events）」と題される本編の手法を概説する（Price, 2002: 31-40）。本編は，1685年から和平が結ばれる1762年まで通時的な構成をとり，「英雄たちの時代 1685-1748」「自由に向かって 1749-1759」「ついに自由だ 1760-1762」の順に大別される（章番号はない）。こうして三つに区分された時代は，逃亡や戦いなど，具体的な出来事やエピソードごとにタイトルを付けた多数のセクションからなる（Price, 2002: 41-181）。各セクションではページが上段と下段に分かれ，両段を異なる文章が並行して走る。上段にはサラマカの語りや朗唱が番号付きで並び（総計202片），下段では，同じ出来事に関する文書・図像史料をふまえた記述と分析が進行する[11]。以下，この手法にみられる調査と表現の関係を時間という観点から考察していきたい。

全体を通じて注目すべきは，『一銭五厘たちの横丁』とは対照的な年号や日付の扱いである。上段では，個々の出来事について複数の話者の語りが記され，ほぼすべての話者の名前と年月日がわかるようになっている。たとえば，サラマカの英雄Ayakoの逃亡に関するセクションは2〜6番の語りからなるが，2番は「Kala 5 July 1978」，3番は「Tebini 11 July 1978」というように，語りは末尾に話者の名前と聞き取りの年月日をともなう（Price, 2002: 47-49）。ところが，サラマカの語りや歌を記述したそのテキストには「歴史的」年代がまったく登場せず，上段だけを読んでも，語られる出来事が何年頃におきたのかはわからない。これに対して下段では，植民地政府の遠征軍や使者の日誌などを参照し，出来事の年代や日時を可能な範囲で同定していく[12]。さらに日付という視点から両段を比べることで可視化するのは，聞き取りの場合は調査日が明示される一方，文書・図像資料で明記されるのはあくまでも出来事の「歴史的」年月日や出版年であって，調査の年月日ではない点である。

ここでまず，年代や日付を重視する近代歴史学とは異なり，オーラルに語り継がれていく歴史では年月日の重要性が低いことを確認できる。もちろんこれ自体は新しい発見ではない。むしろ考えてみたいのは，オーラルで対面的な調査の場合はそれを実施した年月日が重視されるのだが，文献調査においてはそれを実施した年月日が当然のように軽視または無視される，ということについてである。『ファースト・タイム』の表現形式は，こうした常識の意味を問い直す契機を与えてくれる。

文献調査の年月日は論文等に明記しないという慣習[13]には，もちろん，文章の冗長性を防ぐとか字数を節約するとかいった機能的な意味がある。だがそれだけでなく，この慣習の背後には，文献は紙上に固着したモノであり生きてはいないという認識が働いていることも指摘できるだろう。オーラルで対面的な調査では，「調査対象」となる人びとの思考や語りは調査という社会関係のなかで変動する。くわえて，彼らが生きている時間の範囲内でなければ調査そのものが成

写真2『ファースト・タイム』

立しない。これに対して，文書や図像は個々の人間の生死の時間をこえて存在し続け，意図的に改変されたり腐食したりすることもあるにせよ，基本的には，書かれ印刷された内容それ自体が変動することはない。つまり，同じ「調査対象」ではあっても，文書と人間はその存在のありかたをまったく異にしている。このような認識がおそらく暗黙のうちに前提となり，文書を相手にする調査と人間を相手にする調査との間で年月日の扱いに違いが生じているのだと考えられる。しかし，生きてはいない文書などのモノが「資料」としての意味を帯びるのは，あくまでも生きた人間が発見し，整理・保存し，そして読む行為を通じてのことである。このようにして調査対象と調査主体との関わりを注視すれば，聞き取り調査と同様に，文献調査もまたパフォーマティブな時間経験であることは明白だ。

調査の時間性と表現との関係をめぐるこの問題について，前節でも論じた記憶の不一致（と一致）に絡めながら，『ファースト・タイム』の記述例を挙げて考えていこう。同書ではほぼ全編にわたり，それぞれの人物や出来事に関して複数のバージョンの記述が並置される。プライスは，サラマカと植民地政府との解釈の違いだけでなく，サラマカ内でのグループ間の競合といった社会関係を考慮しながら，一致しない語りについての分析を下段で加える。そうした論述のなかに，サラマカが伝えてきた歴史とアーカイブズ史料とが「一致」した時間をプライスが書き留める場面がある。「一致」をみたのは，植民地政府の手先として逃亡奴隷との交渉に暗躍した元奴隷，「Kwasimukamba」（以下「Kwasi」）をめぐる出来事であった（Price, 2002: 153-157）。

プライスがKwasiの名をはじめて耳にしたのは，1975年の調査最終日のことであった。「ファースト・タイム」の知識のうち，「裏切者」Kwasiについては機密性がとくに高かった。オランダの史料にも，白人に忠実な元奴隷の交渉者「Kwasi／Quassie／Quacy」の記録は豊富にあった。だがこれらの情報はすぐには結び付かず，この人物に関するサラマカの口承と植民地側の記録の同一性にプライスが気付いたのは，1977-78年頃のことであった（Price, 2002: 153-157）。

1978年7月11日，プライスは，1755年の討伐軍とサラマカとの戦いについて，恩師の歴史家Tebiniから学んだ。その教えは，Ayako（前述の英雄）は短剣で白人兵を全滅させたがKwasiだけは殺さずに対処した，とAyakoの超人的な力を伝える。Tebiniは，そのときのAyakoの言葉と振る舞いをこう語った。

「お前［Kwasi］のことは殺さない。だがな，みんながお前を笑いものにするようにしてやる」。それからAyakoはKwasiをひっつかまえて，ヤツの耳を引っ張ってちょん切った（右耳を引っ張る仕草をする）（Price, 2002: 155）。

同じセクションの下段では，セクションの最後にプライスは次のように書き記す。

［この戦いで］「ほんとうに何がおきたのか」，それを示す驚くべき一片の証拠があるのだが，こ

こ数ページの第一稿を書いているときに，私ははじめてそれに気が付いた（これまで何度となく目の前にしていたのだけれども）。サラマカ側で伝えられてきた戦いの物語は［「歴史的」な信憑性の点で］疑わしいと思うだろうが，そうとばかりはいえないようである。「名高いGraman Quacy」を描いたステッドマン［描画］－ブレイク［版画］の有名な作品［1796年］をよく見ると，〈略〉［Kwasi／Quacyには］右耳が欠けているのだ（Price, 2002: 159）。

プライスはここで，「読み取り」調査における昂奮を抑制した筆致で書き留めている。文書・図像資料の調査もパフォーマティブなものであるということはこれだけでもたしかに伝わるが，しかし私はあえて次のように問うてみたい。Tebiniが「右耳の切断」を身振りとともに語ったのが1978年7月11日だとして，「右耳が欠けている」図像にプライスが気付いたのは，何年何月何日のことだったのだろうか，と。

第一稿執筆中の発見に言及するプライスは，学術書の規範からすれば十分に逸脱した実験をすでにしている。しかしその日付まで書き込んでいれば，1755年頃の「右耳切断」を秘匿しつつも口承してきた約220年間と，文書・図像として保存してきた約220年間の，量的にはほぼ同一でありながら質的にはまったく異なる時間が1980年頃にプライスの机上で遭遇した事態が，さらに強いイメージの喚起力をもって表現されたのではないだろうか。

ここで注意しておきたい点は，プライスは，口承と史料との一致による「実証」に絶対的な価値をおいているわけではないということである。「不詳」をひとつの表現として受け入れた『一銭五厘たちの横丁』に比べれば，学術書である『ファースト・タイム』は，「不詳」を明らかにしようとする志向がはるかに強い。しかし，そもそも秘められた歴史を出版するという矛盾を抱えた『ファースト・タイム』において，「不詳」と「知識」との関係は繊細なものである。『ファースト・タイム』はたしかに，どんなサラマカでも驚くような新しい知識を多く含むとプライスはいう。しかし彼は，すぐにこう付け加えることを忘れてはいない。同書は，「サラマカが［200年以上にわたり］集合的に保ってきた『ファースト・タイム』の氷山の一角でしかない」，と（Price, 2002: 25）。口承と史料との一致の可能性を示す記述は，「右耳切断」以外にも断続的に現れる（Price, 2002: 51-52, 71-79, 81, 83, 93-94, 107, 117-118, 133）。事実の近似値は，まさに「氷山の一角」のように散発的に浮かび上がる。これを通して読者は，口承と史料の一致をみることで与えられる「知識」のみにとどまらず，むしろ，水面下に潜行する「不詳」の時間を想像するきっかけをつかむことになる。

4 日付という表現，知りえない時間

以上，調査にはらまれる多元的な時間をどのように表現に反映できるのかという問いをもちながら，『一銭五厘たちの横丁』と『ファースト・タイム』の表現について考えてきた。以下ではこれまでの論述をふまえ，表現におけるひとつの方法としての日付と，知りえない時間の表現，という2点に論及して結語としたい。

現代社会の文字文化では，あらゆる出版物に刊行の年月日が記載される。こうした環境でおこなわれる調査の現場では，文書資料についてはその刊行年（月日）を確認して記録に残し，フィールドノートには調査の日時を記入する。ところが並行して進むオーラルな日常では，特別の出来事でもないかぎり，調査対象となる人びとも調査者自身も，みずからが体験する出来事の日付は次々に忘れながら生きている。にもかかわらず，たとえば「3月11日」や「9月11日」，あるいは子どもの誕生日や肉親の命日など，ある日付がなんらかの特別の記憶を喚起する現実も一方には存在している。

グローバル標準として機能する日付はこのように，日常生活を統合する均質な記号でありながらも，不均質で多様な経験的時間と複雑に交錯するものである。私は，日付にひそむこうした両義的様相を意識することで，調査と表現とを関係づけるうえでの方法的な可能性をひきだすことができると主張したい。調査者は，論文やエッセイ,学術書や教科書などの執筆に取り組む過程で，調査対象が経てきた多様な時間やみずからの調査経験と対話する。このとき，彼／彼女が次のように問うてみることには意味がある。調査対象の生（せい）のありかたやみずからの調査経験のリアリティを効果的に伝えるために，日付はどのように活用できるのだろうか,と。

『一銭五厘たちの横丁』が示したように，日付を明らかにしないままで進行するテキストは,読者に不安や浮遊感を抱かせることがある。これを裏返していえば，日付が時間の準拠枠になっている現代社会にあって，年月日はたんに歴史的客観性を担保するだけのものではなく，記述に「現実味（リアリティ）」（川田,2006：162）を与える装置としても働くということである。このような日付の効果に関連し,『ファースト・タイム』については,「右耳切断」における口承と史料の一致を語るプライスの記述に対して,文献・図像調査の日付をも書き込むというアイディアを提示した。

私自身もまた，歴史的民族誌『めぐりあうものたちの群像』（青木,2013）を書いたときには，とくに校正を進める過程で，日付を地の文に書き込むかたちの表現を増やしていった。たとえば,出来事の日付，新聞記事の発行日，インタビューの実施日，調査地を訪問した日付，文書資料に貴重な発見をした日付などを,出典表記として（だけ）ではなく，文章の流れにあわせて意識的に組み込んでいった。この工夫は，出来事の表象に時代性や季節感を含ませる効果とともに，調査のパフォーマティブな側面を表現することを狙ったものであった。もちろん，表現における日付の活用は，こうした記述上の細かな工夫のみに限定されるものではない。たとえば，特定の年月日で章や節を構成[14]するとか日記形式を活用するとかいうように，日付を「不詳」にした『一銭五厘たちの横丁』を反転させ，全体の構図として日付を明示的に方法化することも考えられる。

日付は，ふつうは学術的な常識にのっとって機械的に処理しがちである。しかし，それ自体は無味乾燥な記号にすぎない日付は，調査において輻輳するさまざまな経験的時間と接点をもちうるものでもある。さらに「読む」という行為にまで視野を広げて考えれば，日付が調査と読者とをつなぐ回路になる可能性をも指摘できる。読者にとって未知の社会に関する著作であっても，ある日付が読者自身の経験的時間と交錯して彼／彼女の記憶や想像力を喚起し，そうした情動が調査内容への関心を誘発することも想定できるからだ。調査でえられた知見と対話しつつどのような表現がありうるのかを考えるとき,調査者／表現者は,物質的資料からフィールドワーク，そして潜在的な読者までを視界に入れながら，日付をひとつの表現方法として鍛え上げることに挑んでみてもいい。

最後に,『一銭五厘たちの横丁』において丁寧に書き留められた記憶の「不一致」と,『ファースト・タイム』のなかで散発的に浮かび上がってくる口承と史料の「一致」がともに，知りえない時間をも読者に伝えようとするパトスに支えられていたことを再び強調しておこう。

もちろん，いかなる研究も調査を通じて「わかったこと」を書くものであり，知りえないことを「知りえない」とそのまま記述することはナンセンスである。しかし,歴史的研究を含め経験対象を扱う調査者／表現者は，数年間に及ぶ調査過程のどこかで，他者が生きたはずだが調査者には知りえない時間の存在感に気づき，みずからの知性と感情を揺さぶられる経験が何度かあると思われる。であるならば，どのようにすればそうした「不詳」の時間を表現に反映さ

せることができるのか，その方法を開拓することも調査者／表現者にとって挑戦的な課題のひとつになる。

私は，先述の著作『めぐりあうものたちの群像』のなかで，戦後日本の米軍基地における人やモノのさまざまな関わりを，「出会い」と「すれちがい」として描いた。本稿の文脈で重要なのは前者よりもむしろ後者である。「すれちがい」はまさに「不詳」の時間を喚起する意味を担う。同書では，多数の記録や回想を対照させることで明らかになったこととともに，記録や記憶にないこと，モノの所在がわからないことなど，「不詳」という現実をも積極的に書き留めた。こうした表現を通じて私は，調査では知りえないが存在したであろうさまざまな経験的時間について書くことはできないが，そうした時間への回路は開いておこうとした[15]。

記述と分析によって明確に論証できることだけでなく，調査対象となった人びとや資料を取り巻く「不詳」の時間までをも読者が想像し，関心をもてる表現として，どのような方法がありえるのだろうか。この問題は，文化人類学，歴史学，社会学など，広い意味での「社会調査」というアートに関わる多様な書き手にとって，真剣に追求する価値のある方法的課題だと私は考えている。

注

1）この観点は，国立近代美術館フィルムセンターのフィルム・アーキビスト，岡田秀則の「保存」をめぐる議論から着想を得ている（岡田，2016：69）。

2）本稿は，2013-14年に一橋大学大学院社会学研究科でおこなった講義「文化表象論」にもとづいている。同講義を受講して議論を活性化してくれた当時の大学院生諸氏に感謝する。

3）『一銭五厘たちの横丁』は初版の晶文社版と岩波現代文庫版とで写真の配置が異なるが，引用・参照する場合は岩波現代文庫版を使用する。

4）『一銭五厘たちの横丁』出版の約3ヶ月後に38歳で夭逝した児玉隆也については，伝記『無念は力』（坂上，2003）を参照されたい。

5）『一銭五厘たちの横丁』では，会話文と地の文とを明確に区別する一般的形式から逸脱した手法が頻繁にとられている（児玉・桑原，2000：33-34，62，72-85，110，114，174-196）。同一人物の発話であっても，カギカッコで括った「会話体」と「地の文での語り」とが往還し，一読しただけでは発話主体がつかみにくい部分もある。実験的小説にも似たこのような聞き書きの手法も，本稿の問題設定に関連する特徴といえる。しかし，現時点ではこの問題について本文中で論じる用意がなく，以上の指摘のみにとどめておく。

6）たとえば，『一銭五厘たちの横丁』と対をなす作品に「学徒出陣後三十年」（『文藝春秋』1973年12月号）がある（児玉，2001：200-236）。この記事で児玉は，1943年10月21日の学徒出陣壮行会に出た人びとの30年後をたどっている。児玉は，「出陣」当時「“三大紙”に名の出た学生，肉親の合計三十六人」（児玉，2001：213）の群像を語るが，やはり彼らへの取材日は明示されない。

7）『一銭五厘たちの横丁』の2年後，上野英信の『出ニッポン記』（上野，1977）が出版された。同書は，戦後のエネルギー転換にともなって職を失った炭鉱労働者のうち，南米に移住した人びとの20年後の姿をたどった旅――『一銭五厘たちの横丁』の取材とも重なる1974年3月から9月にかけて――の記録である。上野は，訪ねた人びとの移住の日付やみずからの旅の日付を書き込みながら濃密な作品をつくりあげたが，「たずねあてることができたのは，死者を含めて，［二千家族といわれるうちの］わずか百五十名程度」におわったという（上野，1977：525）。

8）児玉の伝記によれば，実際にはほとんどの取材を「若い友人」がおこない，彼らの最初の取材は1974年9月24日，児玉が訪れたのは11月に入ってからだったという（坂上，2003：240-245）。

9）リチャード・プライスは多様な作品を出版し続けている。後述するように『ファースト・タイム』は斬新な表現方法をとっているが，表現に工夫をこらしたほかの作品として，たとえば，カリブ海のマルティニーク島（フランス領）の伝説的人物をめぐる民族誌がある（Price, 1998）。

10）本稿では，1983年の初版ではなく，序文を加えた2002年の新版に準拠する。引用文はすべて筆者訳。

11）プライスは，こうした本編の読み方を次のように薦めている。前提としてセクションごとに読むことが望ましい。上段は「ファースト・タイム」という過去をサラマカがどのように体系づけている

のかを伝えており，はじめに読む。次に下段を読み，問題とされている出来事について多面的に把握する。そのうえで再び上段を読むことで，サラマカの年長者が語ったり歌ったりするときにどのような光景を思い描いてほしいと考えているのか，より近似した理解をえられるだろう，と（Price, 2002：38-40）。

12）上段と下段の違いがとくに際立つのは，和平が結ばれた日に関する最後のセクションである。サラマカの歴史意識にとって極めて重要なこの日は，上段では，聞き手のプライスに向けた語りと，祖先に向けて発される歌／祈りで表現される。一方の下段では，植民地政府からサラマカの居住地に派遣された使者の日誌から，1762年11月3日，午前6時，8時，8時30分，9時，10時に何が起きたのか，「具体的」な描写を引用する（Price, 2002: 175-178）。

13）ただし，つねに変更されうるウェブサイトの文献についてはアクセス日を明記する慣習が成立している現在，この「常識」も揺らぎつつある。

14）その代表的な例にフォークナーの小説『響きと怒り』（フォークナー，2007a；フォークナー，2007b）がある。人類学者の菅原和孝は同書をふまえ，小説と民族誌における「直接経験」と「表現」の関係について論じている（菅原，2013）。

15）同書のこうした記述が成功しているかどうかは著者である私が判断することではないが，安田常雄による書評が，「すれちがい」や「『沈黙』という形」をとった表現に着目している（安田，2014：130-131）。

文献

青木 深，2013，『めぐりあうものたちの群像――戦後日本の米軍基地と音楽1945-1958』大月書店。

ウィリアム・フォークナー，2007a，『響きと怒り（上）』平石貴樹・新納卓也訳，岩波書店。（Faulkner, W., *The Sound and the Fury*, 1929.）

――――，2007b，『響きと怒り（下）』平石貴樹・新納卓也訳，岩波書店。（Faulkner, W., *The Sound and the Fury*, 1929.）

川田順造，2006，『母の声，川の匂い――ある幼時と未生（みしょう）以前をめぐる断想』筑摩書房。

児玉隆也，1975，『一銭五厘たちの横丁』晶文社。

――――，2001，『淋しき越山会の女王 他六編』岩波書店。

児玉隆也・桑原甲子雄，2000，『一銭五厘たちの横丁』岩波書店。

岡田秀則，2016，『映画という《物体X》――フィルム・アーカイブの眼で見た映画』立東舎。

Price, R., 1998, *The Convict and the Colonel: A Story of Colonialism and Resistance in the Caribbean*, Boston: Beacon Press.

――――，2002, *First-Time: The Historical Vision of an African American People*, Chicago and London: The University of Chicago Press.

坂上 遼，2003，『無念は力――伝説のルポライター児玉隆也の38年』情報センター出版局。

菅原和孝，2013，「『原野の人生』への長い道のり――フィールドワークはどんな意味で直接経験なのか」『文化人類学』78（3）：323-344。

上野英信，1977，『出ニッポン記』，潮出版社。

安田常雄，2014，「書評 青木深著『めぐりあうものたちの群像――戦後日本の米軍基地と音楽1945-1958』」『同時代史研究』7：127-131。

特集論文

5

参与する知を仕掛けていく パフォーマティブな調査表現

関わりの構築へ

小倉康嗣
立教大学社会学部 准教授

1 社会調査の再帰性と調査表現の意味

私はかねてより〈調査表現〉の問題に強い関心をもってきた（小倉,2006；2011b；2013a；2013b；2014a；2014b；小倉ゼミ,2015)。なぜならば「表現」は,コミュニケーションによって社会的現実をつくりだしていく時代の社会調査のきわめて重要な一過程であるからである。現代社会において社会調査は,コミュニケーションによって社会的現実を共同構築していく媒介装置としての性格をいっそう強くもってきているといえるだろう。そう,〈社会調査の再帰性〉というべき側面である。

社会調査とは,社会への自己言及であり,社会の自己反省を惹起するメディアである。社会調査のデータ記述＝〈調査表現〉が,人びとに広く参照され,解釈され,社会的認識を生み,行為実践に影響を及ぼし,新たな社会的現実をつくりだしていく。そしてそうやって生成された新たな社会的現実が,再び社会調査の対象となっていく――現代社会における社会調査は,このような社会過程を構成する動的な側面を強くもっているのではないだろうか。

A・ギデンズがいち早く指摘したように「社会科学の『知見』は,その知見が言及する『研究対象』から隔離されたままの状態でいるわけではなく,たえず研究対象に再参入し,研究対象を作り変えていく。……(中略)……事象世界を記述するために鋳造された概念や知の主張が逆戻りしてその事象世界のなかに進入する」(Giddens, 1993=2000: 23-24)。社会調査は,この「社会科学の『知見』」が「事象世界のなかに進入する」プロセスを媒介する最たるものである。

そして社会調査とは,「調査をする人」だけでなく,「調査を受ける人」「調査を知りたい人（読む人)」を巻き込んだ,それ自体がすぐれて社会的な営みである。それはすでに社会過程の一部（社会生成の現場）になっているといえるであろう。私が〈調査表現論〉を調査過程論・社会過程論と地続きなものとして論じてきたのも,〈調査表現〉と調査過程・社会過程の再帰的な関係を強く意識してのことであった（小倉,2006；2011a；2011b；2013a)。このような社会調査の実践的＝社会生成的な側面がますます強まっているのがハイ・モダニティ（再帰的近代）たる現代社会なのではないかと思う。

他方,このような現代社会のなかで社会調査の制度化が進んでいくにつれて,社会調査が手続主義・技術主義・市場主義に陥ってしまうという,いわば社会調査の「マクドナルド化」(Ritzer, 1996=1999）ともいうべき皮肉な状況も出てきているように思う。そしてこれも,〈社会調査の再帰性〉の一側面であるといえるであろう[1)]。

だからこそ私たちは,このような歴史的社会的状況を踏まえ,いまいちど「なんのための調査なのか」という根本的意義（換言すれば,社会調査の社会的実践性をどう考えるのかという問

題）と〈人間関係としての社会調査〉という原点に立ち返り，人間の相互的・社会的コミュニケーションとしての社会調査の新たなスタイル（在り方）をつくりだしていくべきステージに立っているといえないだろうか。調査過程論・社会過程論と分かちがたく結びついた問題として〈調査表現論〉がクローズアップしてくるゆえんもここにある。そしてこのような問題意識は，私が長年取り組んできた〈ライフストーリーの知〉＝「ライフストーリー研究はどんな知をもたらし，人間と社会にどんな働きかけをするのか」の探究ともそのまま重なり合う[2)]。

本稿では，このような問題意識をどのように〈調査表現〉に反映させ，実践してきたのか，私なりの試みを記し，そこから展望できる課題について考えてみたい。

2　いかに記述し，いかに伝えるか

四重の生成のらせん

さきに，私たちはいまいちど社会調査の社会的実践性をどう考えるのかという問題と〈人間関係としての社会調査〉という原点に立ち返り，人間の相互的・社会的コミュニケーションとしての社会調査の新たなスタイル（在り方）をつくりだしていくべきステージに立っているのではないか，そこに調査過程論・社会過程論と分かちがたく結びついた問題として〈調査表現論〉がクローズアップされてくるのではないか，と述べた。では，私自身はそれをいかに試みてきたのか。まずは，この問題意識を強く抱く出発点となった，博士論文を書籍化した拙著『高齢化社会と日本人の生き方――岐路に立つ現代中年のライフストーリー』（小倉，2006）を題材に記してみたい。

「〈生き方としての学問〉へ――。老いの季節を迎えんとする『団塊の世代』前後の現代中年と，30代でゲイでもある研究者が，それぞれに社会と対峙した経験をたずさえ，出会って生成される新たな人間存在の地平。それを両者のライフストーリーの螺旋のなかから渾身の力で描き出す。人間生成とエイジングの社会学。」

これは，この本の帯の言葉である。ここには，調査過程論・社会過程論と分かちがたく結びついた〈調査表現論〉的な意味が込められている。本書の問いは，社会の高齢化・成熟化（本書ではそれを学術的に「再帰的近代としての高齢化社会」と表現している）を背景に人間の「生（life）」のありようが根本的に問い直されてくるなかで，人間存在と社会との関わりあいをどう考え，その存在論的基盤をどこに求めていけばよいのか，という「生き方」や「生きる意味」をめぐる問いであった。そして，この問いの只中にいる現代中年（向老期にある中年後期の人びと）への，足かけ7年にわたる縦断的なライフストーリー・インタビュー調査をおこない，その調査過程のなかで浮かび上がってくる知見の生成過程を〈経験の実践プロセス〉として描出し，作品化したのが本書である。

その作品化にあたっては，つぎのような〈調査表現〉の試みをおこなった。すなわち，《調査協力者（本書に登場する現代中年）の生の経験のなかでの生成》《調査研究者（著者である私）の生の経験のなかでの生成》《調査協力者と調査研究者の相互作用経験のなかでの生成》という三重の生成のらせん＝〈経験の実践プロセス〉を記述しながら，《読者の生の経験との相互作用のなかでの生成》という四重めの生成のらせんを図る作品構成である。

そこには，《調査協力者の生の経験のなかでの生成》《調査研究者の生の経験のなかでの生成》《調査協力者と調査研究者との相互作用経験のなかでの生成》という三重の生成のらせんが，「再帰的近代としての高齢化社会」という歴史的社会的状況を背景に生み出され，さらにそこに《読者の生の経験との相互作用のなかでの生成》が

交差していく。そしてそのプロセスそれ自体が社会過程なのであり，学問（調査研究）の社会的実践性のひとつの局面として社会生成の重要な回路ではないか，という意図が織り込まれている。

それは，まさしく「調査をする人」「調査を受ける人」「調査を読む人」が相互にコミュニケーションし，社会生成に参与していく舞台を作品化するという〈調査表現〉の試みであった。

調査過程を刻み込む

とりわけ，〈調査表現〉として本書でこだわったことは，調査知見をワンショットの「客観的事実」として提示するのではなく，知見を得るに至った一連の調査過程を〈経験の実践プロセス〉として描出していくことであった。つまり，どのようにしてその知見に到達したのかというプロセスそれ自体を，（「検証」よりも「生成」をめざす）「知」の重要な構成要素として呈示した。

本書では，調査協力者である現代中年と調査研究者である私との対話実践のなかでライフストーリーが生成されていくプロセス，相互了解が得られていくプロセス，さらには縦断的な3年〜3年半ごしにわたる出会い（初回調査）と再会（再調査・再々調査）のなかで互いの解釈をすり合わせていくプロセスを赤裸々に描出した。それと同時に，その舞台裏として，調査研究者たる「私」という主体がいかにして立ち上がってきたかへの内省（問題意識の生成につながる調査研究者である私自身の生活史的経験のカミングアウト・ストーリー）を再帰的に織り込み，そういった調査研究者の経験（調査に臨む動機）と調査協力者の経験（調査に応じる動機）との相互作用場面（インタビュー途中で，調査研究者である私が図らずも調査協力者に自分がゲイであることをカミングアウトしてしまう場面や，調査協力者が調査研究者である私をどう受けとめ，どんな思いを抱いてインタビューに応じていったかを率直に尋ねた場面など）を開示し，それらを吟味しながら，解釈や知見の生成プロセスの深層を探った。

これらは，研究対象の経験と研究者自身の経験との出会いのプロセスをも含めた〈経験の実践プロセス〉としての調査過程それ自体を，ひとつの社会過程として位置づけて当該研究のフィールドとし，「作品」に刻み込んでいく試みであった。インタビュー（社会調査）それ自体が，本書のキー概念でもある「人間生成」のプロセスそのものなのであり，そこに，調査協力者である現代中年の人びとと，調査研究者である私の〈再帰的社会化〉（小倉，2001；2006）のプロセス（自己の変容プロセス）が発現する。これら調査過程の描写をめぐるさまざまな仕掛けは，一種のパフォーマンスでもあり，四重めの生成のらせん＝《読者の生の経験との相互作用のなかでの生成》のための，読者の経験への働きかけを企図したものであった。

本書のライフストーリーの記述部分では，調査協力者のライフストーリーはもちろん，調査研究者である私自身の働きかけ，発話や問いかけの意図・動機，そして私自身が調査協力者の語りから感じたこと，それらも最大限露わにする記述の仕方をおこなっている。そのことによって，聞き取った調査協力者のライフストーリーにばかりでなく，調査研究者・調査協力者のインタビュー場面での経験の仕方にまで読者の注意を喚起し，読者の〈追体験〉を促すという意図がそこに込められている。そして，そこで喚起される《調査協力者の生の経験》《調査研究者の生の経験》《調査協力者と調査研究者の相互作用経験》《読者の生の経験》の相互的コミュニケーションのらせんによる新たな了解の生成こそが，本書のメタ理論たる「生成的理論」[3] の要諦であるという構成になっている。

いわば，それは「劇場」なのであり，本書で上演される〈経験の実践プロセス〉に，共感であれ，反感であれ，観客としての読者が自らの生を重ね合わせ，自身の経験と対話することで，新たな意味の生成がなされんことを企図したものであった。

〈参与する知〉としての社会調査

これまで見てきたような本書の〈調査表現〉の手法は,研究作品によって読者の経験を触発することも，学問の実践性として社会生成の重要な回路ではないか，という考えから編み出したものであった。それは，さきに指摘した，社会調査それ自体が社会過程の一部であるという認識を，作品＝表現として具体化する作業でもあった。

本書でのインタビュー調査によって構成された知見に，〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉という概念がある。これは,「個人対社会」の枠を超え出て紡がれていく〈経験〉（生命経験・身体経験・生活経験の重層的連なりとしての根源的経験という意味で山型括弧を付けている）の生成継承性を概念化したものであった。〈経験〉がミメーシス（自らの生をそこに重ね合わせ，創造的に学ばれる＝真似ばれる）的に継承され，再構成され，新たな生（life）が生成されていく,そんな存在論的つながりである。

本書では,これまで見てきたような〈調査表現〉＝ライフストーリーの呈示手法をとることで,本調査研究の一連の〈経験の実践プロセス〉（さきに指摘した三重の生成のらせん）を読者に〈追体験〉してもらい,そうすることで,インタビュー調査によって発現した〈経験〉が読者にミメーシスされることを企図したわけである。それは，研究作品それ自体を通じた〈〈経験〉のミメーシス的ジェネラティビティ〉の惹起という社会的実践性を意識してのことであった（いわば調査知見と再帰的な〈調査表現〉によって，知見を読者に伝えていく試みであった)。その意味で，本書で試みた〈調査表現〉は，研究の社会的実践性をどう考えるのかという問題とも不可分な関係にある。

上述のような〈経験の実践プロセス〉が分厚く記述されることは，とくにライフストーリー研究の〈調査表現〉においてきわめて重要なことであると私は考えている。それは，そのプロセスの描出が調査協力者のライフストーリーの文脈（社会的位置づけや背景）を明確化するという意味をもち，知見や解釈の妥当性や信頼性に関わってくるからということももちろんある。だが,それだけにとどまらず,なによりもそのプロセスを呈示することで，本書の知見が読者自身の生の経験のストーリーの再構成（生成）へと開かれていくからである。つまり，どのようにしてその知見に到達したのかという，知見が生成されてきた〈多層多元な関係的コンテクスト〉＝生成のらせんを読者に生々しく突きつけ，そのことによって読者の生の経験の重ね合わせの可能性＝参与可能性が開かれていくからである。そして,これこそが〈ライフストーリーの知〉が切り拓く研究の社会的実践性であると考える（小倉,2011b)。

かつて，内田義彦は「社会科学でも思想としての滲透力，心のうちに深く入ってそこから働きかける力を一般の人に対してももっていなければならない」（内田,1992：32）と述べた。また,K・J・ガーゲンは「理論の文化的参加の文脈」の重要性を指摘しながら,「この文脈において最も重要なのは，様々な文化的参加を呼びかけうる人間科学的対話である。文化は，いかにして,科学の中核的命題を,自らの実践のために利用するのか？　どうすれば,科学者コミュニティを,文化の声に耳を傾ける開かれたコミュニティにすることができるのか？　科学の中核的命題群のもつ文化的価値を探るために，どのような自省的プロセスがスタートできるだろうか？」（Gergen, 1994=2004: 117）と問いかけている。

〈ライフストーリーの知〉を生かすべく本書で試みた〈調査表現〉は，このガーゲンがいう「人間科学的対話」の幅＝コミュニケーションへの参与可能性を広げ，深めていく役割を担っている。つとに指摘されてきた,ライフストーリーを呈示するという調査研究の回答方法がもつ意味（井腰,1995）のひとつも，ここにあると考える。その意味で,ライフストーリー研究を「作品」という言葉で表現するのは,「人々の心に直接に

うったえる文学作品に通ずる文体や構成を示唆するとともに，社会科学の研究と表現についての方法概念」（長，1992：372）でもあるからではないだろうか。

学知が生成される学問活動の土壌は，人びとの〈経験〉の土壌と地続きであり，研究という営みは，その地続きの土壌における関係性のなかで実践的に検討され，吟味されていくべきものであろう。本書の〈調査表現〉の試みは，この「地続きの土壌における関係性」が社会的現実をつくっていくプロセスのなかに学問（社会調査）があるということを再帰的に自覚し，そこに参与していくための学術表現の試みであり，〈参与する知〉の試みであった[4]。

3 調査を演劇で表現する

「記憶の継承」の新たな展開のために

これまで述べてきたような私なりの〈調査表現〉の試みは，その後，原爆体験の継承というフィールドで，さらなる展開を見せている。

このフィールドでは，記憶の風化が大きな問題となっている。ここにいう「風化」とは，もちろん存命被爆者の高齢化によって直接体験を伝えられる被爆者が少なくなっていき，原爆の記憶が薄れていくという局面がまずある。だがそれだけではなく（それよりもむしろ），原爆体験がこれまで呼び起こしてきたさまざまな意味や警告やスローガンの「凡庸化・陳腐化」（米山，2005）という局面が大きい（小倉，2013b）。すなわち，「『核廃絶』『平和の尊さ』『和解』といった『ヒロシマ』にまつわる常套句」が「行政化され，儀礼的にくりかえし唱えられることで形骸化し」ていくことであり，そのことによって「人を揺り動かす力を失ってゆく」ことへの危機感である（米山，同上）。それは同時に，「非被爆者にとっての〈原爆という経験〉――その人間的・社会的意味」（小倉，2017）が，いまだ十分に語られていないという問題を浮上させる。

そこでは，たんなる知識としての記憶の継承よりも，非被爆者（非当事者）が自らが切実に関わっている問題として，その地続き性をいかに感受できるのかという〈社会学的感染力〉（小倉，2014b）を働かせた記憶の継承が，より鋭く問われているように思う。では，この問題に応えるための社会調査とは，なにを調査し，どう表現していけばよいのだろうか。そこで試みたのが，非被爆者（非当事者）の原爆体験（当事者体験）への参与のプロセス（新たな関わりの生成プロセス）それ自体をデータとしたうえで，なおかつそこに，非被爆者（非当事者）の原爆体験（当事者体験）への参与のプロセスの「行為＝体験」性を刻み込んでいくような〈調査表現〉への展開である。

高校生が描く原爆の絵の取り組みへの調査

2015年12月11日～20日の10日間にわたり，東京・新宿の劇団「青年劇場」によってある舞台演劇が上演された。タイトルは「あの夏の絵」（福山啓子作・演出）。私が長年調査している，広島の高校生が被爆体験証言者の原爆体験の絵を描く取り組みを舞台化したものである（小倉，2013b；2015）。

この原爆体験の絵を描く取り組みは，広島市立基町高校創造表現コースで2007年からおこなわれている。広島平和記念資料館からの毎年の依頼に応じて，数名の被爆体験証言者の証言に出てくる複数場面[5]を，高校生たちが半年以上の時間をかけて描く。課外の時間にボランタリーにおこなわれる大変な作業であるが，毎年，依頼場面数以上の希望者（絵を描きたいと立候補する高校生）が集まる。絵を描くことが決まった高校生たちは，証言者と七度，八度，多いときは二十数回と，何度も会い，じっくり話を聴きながら絵を描いていく。そして完成した絵は，証言者の証言に使われるのである。

私は，2010年にこの取り組みのことを知って以来，魅了され，追いかけ続けている。「最初は怖

くて，吐きそうになりながら絵を描いてたんですけど，証言者さんの話を聞くごとに，伝えたい，伝えなければという強い気持ちがどんどん大きくなっていって」「なにもわかってなかったんだな，というのをすごく感じて」「○○さん（証言者の名前）が見た地獄のような風景のその，トラウマからやっぱり，うん，自分が主じゃなくなったというか」「駆り立てられている」「突き動かされるというか」と，私のインタビューに静かに答えながら懸命に絵を描く高校生たち，思い出すだけでもつらくなる記憶をふり絞るように語る被爆者たち，そしてそれらを腹を据えて見守る先生の相互行為が，そこに積み重ねられていく。

もちろん，完成した絵自体はものすごい迫力で，地元メディアでもよく取り上げられる。だが，この取り組みの魅力は，絵が完成するまでの地味なプロセスにこそあり，その深部についてはほとんど知られていない。被爆者と何度も会い，何度も話を聴いて，七転八倒しながら絵を描いていくなかで[6]，高校生たちはわかった気になっていたということを思い知り，自らの作画意識（つまり自分自身）を相対化し，自立し，心情的にも精神的にも大きく変わっていく。

> 高校生：最初に，下絵のときに人描いて，赤い絵の具塗っちゃったときに，ものすごい気持ち悪さが襲ってきて。
> 小倉：うん。ど，どんな感じ？
> 高校生：なんか＊＊[7] こむっていうか，そこでやっとなんかいろいろ受け入れた感じなんです。
> 小倉：「いろいろ」って？
> 高校生：なんか（原爆）資料館の人形とか見て，あの，あぁなんかこういうふうに火傷して，こういうふうに悲惨な状況になってたんだなっていうのが，たぶんあの，ぼんやり……見るだけだと，たぶんぼんやり理解してただけで。
> 小倉：そうだね。ぼんやりだよね。
> 高校生：描いて初めて，あっ，こういうことだったんだって。
> 小倉：あぁ……え，「こういうこと」ってどういうことなの？　言葉にするのは難しいと思うんだけどさ。
> 高校生：とりあえずあの，人間を塗る色じゃなかった気持ち悪さとか。……（中略）……なんか描いてみて，下絵描いたのが深夜だったんですけど，前にして寝れなくなっちゃって。
> 小倉：そうでしょう。
> 高校生：それでそのまま朝まで，こう，うつらうつらはしながらなんですけど，しんどかった。やっぱり最初，赤で塗っちゃったとき，あぁっ，赤なんだっていうか，これ，いま絵の具で塗ったけど，これ血とか，その人間の皮膚なんだなっていうことがわりと受け入れられなかったというか，受け入れざるを得なくって，ちょっとしんどかったです。

「話すことが苦手なので（絵を描いてるんです）……」と言いながら，とつとつとその身体から出てくる等身大の言葉は，「形骸化」「陳腐化・凡庸化」からはほど遠く，深く，みずみずしい。「その場所で自分がその情景を見ているというか，そういう感覚があるので」「体が読み込むというか」「もう本当に言葉にならない感じ。なんかこうバァーッてくる感じで」「いままでの（自分勝手に感じていた）原爆は怖いとか，残酷だとか，そういうのはなんか嘘，嘘だったというか」「単純に怖いという，それだけじゃなくて，もっと苦しみみたいなのを感じました，このときに。もっとこう，つらいとか，悲しみとか憤りとか，そういう感情も」「うめき声が聞こえていたとかそういうふうな話も聞いて，その倒れている人ひとりひとりにもそれまで人生があって，で，こういうふうに被爆して亡くなっていくっていうそのつらさとか苦しみが，すごくもう自分では想像できないぐらいあったと思えて」――人間ではない死に方をした死者たち，人間性を踏

みにじられながらも懸命に生きぬいてきた被爆者の生に触れ，それを自らの身体を通して描いていく「行為＝体験」のなかで，けっして甘くはない人間性・社会性が呼び起こされていく。

演劇化のプロセスとその表現

私は，このプロセスにこそ〈参与する知〉の契機があり，そこに「形骸化」「陳腐化・凡庸化」した記憶の継承を打破する足がかりがあると思い，調査をおこなっていた。そして〈調査表現〉として，このプロセスに「さらなる非被爆者」[8]（小倉，2013b：246）が出会い，それを生きるように経験してもらえる仕掛けが必要だと感じていた。そのことに深く共感してくれた劇作家・福山啓子氏が，まさしくこのプロセスを見事に舞台化してくれた。経緯はこうであった。

「原爆被害者の基本要求」[9] 策定30年を記念した被爆者の集会で，「基本要求」の内容を伝わりやすいものにするべく朗読構成劇が制作され上演されることになった。被爆者のあいだでも，若い人たちに響く言葉，伝わる言葉を紡ぎ出していかねばならない，「さらなる非被爆者」に届くものにしていかなければならないという切実な問題意識が高まっていた。集会の実行委員会の会合でなにか「さらなる非被爆者」が入りやすい話はないか議論になったときに，基町高校のこの取り組みで調査してきたことを話したところ，同席していた被爆者はもちろん[10]，朗読構成劇制作担当として同席していた福山氏が強い関心を示してくれた。そして，拙稿（小倉，2013b）に記述した基町高校の原爆の絵の取り組みへのインタビュー内容が，そのまま朗読構成劇台本に取り入れられた（日本原水爆被害者団体協議会，2014）。その台本を制作した福山氏が，「このままで終わらせるのはもったいない。本格的な舞台にしたい」と言ってくれ，私も引きつづき基町高校の原爆の絵の取り組みを追いかけていたので，それから約1年弱，一緒に広島に何度も足を運び，基町高校の高校生や卒業生，先生，被爆証言者たちに取材やインタビューを重ね，それらをもとに舞台演劇「あの夏の絵」の脚本ができあがった。

その取材やインタビューは，基町高校の高校生たちや被爆証言者の感情や考え，経験については，私がこれまでのこの取り組みへの調査研究の積み重ねを生かして自分の調査（社会調査）としてインタビューし，舞台化するために必要な具体的なこと（油絵の描き方や証言に出てくるエピソードの立ちふるまい等）は，福山氏が取材するといったかたちでおこなわれた。そしてインタビュー・トランスクリプトは，二人で共有した。脚本のセリフは，そのインタビューからほぼ忠実に構成されている。

もちろん，この舞台演劇の脚本は福山氏単独による優れた作品であるが，脚本の素材となった語りは，前項までで述べたような社会学的問題意識から引き出されたものであった。当然そこには，この取り組みを追いかけ続けることになった私自身の原問題[11]（小倉，2015）も投企されており，脚本にも取り入れられている。その意味で，脚本の取材・インタビュー段階ですでに社会学的な視点や第2節で述べた〈ライフストーリーの知〉の認識論／存在論が生かされており，この舞台演劇そのものが，その調査過程・社会過程と結びついたひとつの〈調査表現〉であった。

非被爆者である高校生が紆余曲折しながら被爆者と思いや感情を重ねていくプロセス，被爆者の証言に出てくる場所を実際に自分の足でたどり追体験していくプロセス，そういったプロセスのなかで新たな認識や感覚が生成されていく「経験の学び（まねび）の連鎖」（小倉，2013b：243-244）を，この舞台演劇は，福山氏の直球かつ巧みな脚本構成と演出によって，「さらなる非被爆者」を巻き込むように，パフォーマティブに表現していく。自らの原爆体験をけっして語ろうとしない祖母と暮らしながら，絵を描くことをひそかに決意する高校生。広島で平和教育を受けながら被爆証言にまったく関心を示さない

高校生。東京から転校してきて原爆のことをなにも知らず，被爆証言を聞いてからショックを受けて学校に来なくなる高校生。世代的にも立ち位置としても被爆者と高校生の間に立つ美術部教師。必死に原爆体験の証言を続けるも病に倒れる被爆者。その被爆者に代わってこれまで一度も語ったことのない原爆体験をふり絞るように語りだす高校生の祖母。この6人の登場人物が，それぞれの立ち位置（ポジショナリティ）から，迷いや葛藤，覚悟を見せながら，思いを重ね，絵が完成していく。

そのプロセスには，原爆体験の継承に対するトラウマ的な感情[12]の意味と同時に，「〈被爆者－非被爆者－さらなる非被爆者〉のなかで繰り広げられる被爆体験の生成と連鎖」（小倉，2013b：245）をまなざす社会学的な視点が，好演した俳優たちのパフォーマンス[13]として刻み込まれ，「さらなる非被爆者」たる観客を巻き込んでいくのである。

観劇した観客からは，「完成した3枚の絵が，観客としても見えるようでした」「スーッと入ってきた。東京から転校してきた高校生がいたから，（原爆から縁遠い）自分でも入っていけた」「私たちは分かったつもりでも，本当に分かっていないのだということが分かりました」といった声や，つぎのような声が寄せられた[14]。

「原爆とは。被爆とは。ちゃんと考えたことがありませんでした。調べたことも，聞いたこともなく，劇中，少し生々しい話をするシーンで『怖い』と思いました。でも，終わりに近づくにつれて変わっていく『ナナ』[15]をみて，とても他人事ではないなと思うようになりました。昔の出来事を学ぶ意味がやっとわかったような気がします。まるで本物の高校生のような，とてもリアリティのあるお話でした。こんなに真剣に観たお芝居は初めてです。」（高校生／東京都）

「非被爆者である高校生たちが被爆体験証言者から話を聴いて原爆の絵を描くという行為は，証言者という他者の被爆体験を自らの身体を通して理解し，しかもそれをさらなる他者に伝えるという『行為』であり，『体験』である。この『行為＝体験』性こそは，被爆体験への新たな関わりを生成する〈参与する知〉の契機である」（小倉，2013b：244）。この〈参与する知〉の契機たる「行為＝体験」性を〈追体験〉させ，観客である「さらなる非被爆者」に仕掛けていくのが舞台演劇「あの夏の絵」であった[16]。

公演は満員御礼で好評のうちに終演し，この秋には基町高校内での学校公演のほか，東京・新宿での5日間の再演，他地域への巡回公演も決まっている。

4　社会調査の社会的実践性——関わりの構築へ

再帰性が増大し，社会的現実の共同構築性が高まった現代社会において，いわゆる「客観的現実」は（社会調査によって明らかになるそれも含めて）社会過程を構成する一要素でしかない。と同時に，その構築性を指摘するだけでは，かえって実質的な生の経験（リアリティ）から遠ざかってしまうことにもなりかねない[17]。社会的現実の共同構築性を踏まえたうえで，そこにどう関わっていくのかという実践的課題に能動的（再帰的）に取り組む社会調査という視点が，これからますます重要になってくるのではないだろうか。

たとえば，原爆体験の継承という社会的現実にいかに関わっていくか。さきの基町高校の原爆の絵を描く取り組みで絵を描き終えた高校生が，つぎのようなことを述べている。

「なんか，そのまま口伝えじゃなくて，やっぱり自分のなかで考えたことをまた言うのは重さが増すと思うし，（——なるほど）はい。そのまま伝えることだけが継承じゃないと思うんで。やっぱり，2代3代どんどん……やっぱり，証言者の方

は亡くなっていくと思うんですけど，その証言者の方の思いと，自分たちの思いをどんどん重ねていったら，証言者以上のその重さが，どんどんどんどん増していくと思うんで，（――そうだよね）はい。だから，（被爆者の方が）いなくなられても，継承していくことは意味があることだと思います。」（小倉，2013b：245）

継承とは，たんなる事実のコピー（複製）ではない。生きられた経験を重ね合わせ，過去の出来事に新たな意味を付け加え，その重さを増していくことである。実際，絵を描いてもらった被爆者自身が，高校生が描いたその絵のリアルさに驚く。「この絵を見るとね，昨日のことのように感じるんです」「あのときの血のにおいまでするような」「私の気持ちが○○さん（絵を描いた高校生の名前）に乗り移って，○○さんの心が私の心になって，共感してもろうた。そのように感じる」と。そして，もし同じ場面の写真があったとしたら，絵と写真とどちらがよいかという私の質問に，どの被爆者も「写真よりも絵がいい」ときっぱりと言う。

実際にその場面を体験したことも，見たこともない高校生が，なぜこのようなリアルな絵を描くことができるのか。そこに〈参与する知〉が生成しているからである。被爆者から（その生きざまも含めて）何度も何度も話を聞いて，被爆者の生きられた経験を自分自身で感じとったという，自分自身の生きられた経験を描いているからである。絵を描き終えた高校生は，それぞれにこうふり返っている。「本当に衝撃だったという。それ（私が感じた衝撃）を，なんとか絵で出せたらなっていう感じでした」「やっぱり，事実じゃなく経験みたいな」「最初は資料を集めれば描けると思っていたんですけど，でも（話を聴き絵を描いていると）事実よりなんか先に来るものがある。……事実に合わせようという気持ちよりかは，自分の感覚を大切に描いていったら，おのずと事実にも近づいていくと思うから，そのときの気持ち，感情みたいなものを大切にするというか」――。

高校生にとって，「どんなに知識を増やしても」[18] 原爆体験は絶対的な「他者の経験」である。だが，被爆者の話に衝撃を受け，いろんなことを感じ考えながらもがき苦しんで絵を描いたという経験は「私の経験」である。その経験が，絵の具を塗り重ねるように被爆者の経験と重ね合わせられ，それが原爆体験のリアリティ（＝「重さ」）を増大させていくのである。

被爆者（当事者）の経験とそれを聞いた非被爆者（非当事者）の経験が相互作用し，積み重ねられていく。そのことで原爆体験が深く豊かになり，より伝わりうるものになっていく。これは社会調査という行為そのものである（小倉，2011b）。そしてそこに「さらなる非被爆者」が参与可能になることで，この経験の相互作用と積み重ねが広がっていくこと。それが社会を豊かにしていくのではないだろうか。

さきに言及した舞台演劇のパンフレットに寄せた拙文で，私は以下のように書いた。

「……『そのまま口伝えすることだけが継承じゃない。証言者の方の思いと，自分たちの思いをどんどん重ねていったら，その重さが増していくと思う』――基町高校に私が初めて取材にうかがったときに，絵を描き終えた高校生の口から噛みしめるように出てきた言葉である。この舞台の制作・上演プロセスそのものが，彼女が言う『思いをどんどん重ね』ていく『継承』のプロセスなのだと私は思う。観劇にいらした皆さんと『思いをどんどん重ね』，『その重さが増していく』ことができたならば，それは未来への希望である。」（小倉，2015）

佐藤健二が鋭く指摘していたように，社会調査が「すでにある社会事実への接近のプロセスではなくて，社会的なるものに対する認識の生産のプロセスであ」り，「このプロセスは単純な

観察や収集ではなくて,コミュニケーションとして分析されるべきこと」(佐藤,2008：7) であるならば,そして先述したように,コミュニケーションによって社会的現実を共同構築していくという状況が現代社会においてなおいっそう高まっているのならば,このようなコミュニケーションを豊かにしていくこと[19]は社会調査の重要な役割 (第1節で述べた「なんのための調査なのか」という根本的意義) であり,それこそ社会調査の社会的実践性ではないだろうか。

このとき〈調査表現論〉は,社会調査論の中心に位置する重要な課題として新たに据えられるといえるだろう。〈調査表現〉――いかに記述し,いかに伝えるか――は,コミュニケーションそのものであり,自らの生と社会との地続き性を感受させるメディアである。と同時に,他者とのつながり・社会的なるものを構築していく社会的実践＝社会過程そのものだからである。

注

1) ただし,これは表層次元での再帰性である。つまり,私たちは〈より深い次元での再帰性〉に切り込んでいかなければならない (小倉,2013c)。

2) この〈ライフストーリーの知〉を私がどう捉えているかについては,紙幅の制約上詳述する余裕がない。小倉 (2011b；2013a) を参照されたい。

3)「慣習的な理解のあり方に挑み,新たな意味や行為の世界を開いてくれるような,世界についての説明」(Gergen, 1999=2004: 175) である。K・J・ガーゲンは「文化で自明視されている諸前提とは対立し矛盾する視点を提供し,新たな中核的命題群を切り開いていくような理論」(Gergen, 1994=2004: 76),「理論の既存のシステムへの関わりを疑問視し,新たな行動選択肢を生み出すような理論」(Gergen, 1994=2004: 119) を「生成的理論」と呼んでいる。

4) このような本書の〈調査表現〉に対する読者の反応については,小倉 (2011b) を参照されたい。

5) ここ数年は依頼数が増え,十数名の被爆体験証言者の絵を数十場面描く年もあった。

6) 絵を描く高校生にとって,この作業は精神的にかなりしんどいことである。体験したことも見たこともないことを想像し,証言者の気持ちになって考え,自らの作画意識を相対化しながら描いていかなければならない。しかもそこで描くのは,想像を絶する凄惨な体験である。夜うなされながら,泣きながら描いたという高校生も多い (小倉,2013b)。

7) この「＊＊」は,雑音のためにどうしても聞き取れず,確認しても不明であった部分である。

8) 上述した「形骸化」「陳腐化・凡庸化」を感じ,原爆に対して「自分と距離がある歴史上の出来事」「どこか他人事」「いまひとつ実感というものは得られない」「敷居が高い」「悲惨さや二度と起こしてはいけないことはよくわかっていると自分では思うが,被爆者の心情などはまったくわからないため『原爆はダメ』というような概念になってしまっている」「どんなに知識を増やしても,本当の経験には勝らないと思うから,そんな状況で関わっていくのは自分には不可能」(私の大学の授業で,原爆のイメージについて最初に尋ねたときの学生たちの回答から) といったイメージを抱いている非被爆者 (非当事者) のことである。

9) 被爆者自身が,調査や全国的な討議を重ねて2年以上の歳月をかけて作成した被爆者運動の指針。1980年に厚生大臣の諮問機関であった原爆被爆者対策基本問題懇談会 (基本懇) が意見として出した戦争被害受忍論を乗り越え,「ふたたび被爆者をつくらない」ための被爆者の要求として策定されたものである。「被爆者たちの願いの結晶」と言われている (日本原水爆被害者団体協議会,2006)。

10) 私は,この会合の半年前におこなわれた被爆者の学習会で,基町高校のこの取り組みのことを論じた拙稿(小倉,2013b)について講演したことがきっかけで,この集会の実行委員に誘われていた。

11) 私は5歳のときに,祖母 (原爆に遭った曾祖父を探しに入市被爆した) と母に手を引かれ,初めて広島平和記念資料館を訪れた。熱線で焼けただれ,顔も体もぐちゃぐちゃになって死んでいった人たちの写真を見ながら,母は「あんたのひいおじいちゃんも,こんなふうに死んでいったんよ」と言った。私はその夜から明りを消して眠れなくなった。その後もこのようなトラウマ的な感情を40年間抱き続けることになり,なかなか向き合えないでいたが,この感情にはなにか人間的な意味があるはずだという思いだけは強くあった。そして基町高校の原爆の絵と出会ったとき,初めて平和記念資料館を訪れたときに感じたトラウマ的な感情と同じものを感じ,その人間的な意味を直感した。私の基町

高校の原爆の絵の取り組みへの調査は，一貫してこのような原問題がベースにあり，第2節で述べた「調査研究者たる『私』という主体がいかにして立ち上がってきたか」という私自身のライフストーリーとして，インタビューの際には必ず調査協力者に伝えた。

12) 実際のインタビューでも私が必ず尋ねていた「怖くないんね」という高校生への問いかけが随所に挿入され，絵を描き始めて夜うなされる高校生など，さきに引用した高校生の語りに出てくるような感情や，注11に記したような原問題を象る感情が，この舞台演劇の基軸として大切に取り上げられている。

13) この舞台演劇で役を演じた俳優たちも，稽古に入る前に広島に行って原爆ゆかりの地を歩くのと同時に，基町高校を訪問し，高校生や先生と会っている。私は，この俳優たちにもインタビューを重ねているが，驚くような葛藤を抱えながら，自分自身を問われながら，自らの生に関わるさまざまなことに向き合いながら役づくりをしていたことが痛いほどわかった。だがここで触れる紙幅の余裕がない。別稿に期したい。

14) 公演後のヒアリングや観劇アンケートから拾った観客の言葉である。なお，この舞台の初日の公演を一緒に観劇した橋本一貫氏（基町高校のこの取り組みを開始当初から指導している美術教諭）からは，開口一番「劇として（この取り組みのプロセスを）通して見ることができ，これまでやってきたさまざまな情景がよみがえってきた」「劇そのものにも感激したが，この劇が被爆証言としても成り立っているということにびっくりした」との感想があった。

15) 東京から転校してきて原爆のことをなにも知らない高校生役の名前である。

16) 紙幅の制約上ここではこれ以上論じることができないが，これまで述べてきたような私の調査研究と舞台演劇「あの夏の絵」の表現の関係については，岡原正幸が「アートベース・リサーチ（ABR）」の観点から詳しく適切に分析しているので，ぜひ参照されたい（岡原ほか，2016）。

17) たとえば，かつて小倉（2011b；2013a）で論じた「ライフストーリー研究のhow（インタビュー過程やライフストーリーの構成のされ方：小倉補足）への着眼点への転換を，いかに生活世界や社会的なるものへの認識（what）の豊饒化＝生の豊饒化につなげていくのか」（小倉2013a：102），ライフストーリー研究が捉えようとする「全体的な生を構成する経験には，語りえない断片，ストーリーにならない断片も沈殿している」が「対話的インタビューという相互行為の積み重ねのなかで，語りえないこと・語られないこととどう向き合うか。ストーリーにならない断片をいかにつかまえていくか」（同上）という問題である。

18) 注8で取り上げた，原爆のイメージに対する大学生の回答にあった言葉である。

19) この「コミュニケーションを豊かにしていくこと」の具体的な中身については，「デモクラシーの深化・拡大と〈調査表現〉」について論じた小倉（2011b），「〈〈経験〉のデモクラシー〉と社会生成」について論じた小倉（2011a；2013c），そして「当事者研究と〈社会学的感染力〉」について論じた小倉（2014b）で議論しているので参照されたい。

文献

長 幸男，1992，「解題」内田義彦『作品としての社会科学』岩波書店：371-380。

Gergen, K. J., 1994, *Realities and Relationships: Soundings in Social Construction*, Cambridge: Harvard University Press.（永田素彦・深尾 誠訳，2004，『社会構成主義の理論と実践――関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版。）

――――，1999，*An Invitation to Social Construction*, London: Sage.（東村知子訳，2004，『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版。）

Giddens, A., 1993, *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies*, 2nd ed., Cambridge: Polity.（松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳，2000，『社会学の新しい方法規準――理解社会学の共感的批判（第2版）』而立書房。）

井腰圭介，1995，「記述のレトリック――感動を伴う知識はいかにして生まれるか」中野 卓・桜井厚編著『ライフヒストリーの社会学』弘文堂：109-136。

小林多寿子，2007，「書評 小倉康嗣著『高齢化社会と日本人の生き方――岐路に立つ現代中年のライフストーリー』」『三田社会学』12：125-128。

日本原水爆被害者団体協議会，2006，「原爆被害者の基本要求――ふたたび被爆者をつくらないために」（新版）。

日本原水爆被害者団体協議会（協力＝福山啓子），

2014,「《朗読構成劇》今，ふたたび被爆者をつくらないために――『原爆被害者の基本要求』に込められたもの」。

岡原正幸・高山 真・澤田唯人・土屋大輔，2016,「アートベース・リサーチ――社会学としての位置づけ」『三田社会学』21：65-79。

小倉康嗣，2001,「後期近代としての高齢化社会と〈ラディカル・エイジング〉――人間形成の新たな位相へ」『社会学評論』52 (1)：50-68。

――――，2006,『高齢化社会と日本人の生き方――岐路に立つ現代中年のライフストーリー』慶應義塾大学出版会。

――――，2011a,「エイジングの〈経験〉と時間――根拠なき時代における『生の基盤』再構築のために」『社会学年誌』52：39-66。

――――，2011b,「ライフストーリー研究はどんな知をもたらし，人間と社会にどんな働きかけをするのか――ライフストーリーの知の生成性と調査表現」『日本オーラル・ヒストリー研究』7：137-155。

――――，2013a,「ライフストーリー――個人の生の全体性に接近する」「生／ライフ――『生き方』を主題化し表現する」藤田結子・北村 文編著『現代エスノグラフィー――新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社：96-103, 172-181。

――――，2013b,「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティ――なんのために，どのように表現するのか」浜 日出夫・有末 賢・竹村英樹編著『被爆者調査を読む――ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会：207-254。

――――，2013c,「エイジングの再発見と『生きる意味』――第二の近代のなかで」『三田社会学』18：3-23。

――――，2014a,「生きられた経験へ――社会学を『生きる』ために」岡原正幸編著『感情を生きる――パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学出版会：14-36。

――――，2014b,「当事者研究と社会学的感染力――当事者研究と社会学との出会いのさきに」『三田社会学』19：55-69。

――――，2015,「『あの夏の絵』に描かれたあの感情の意味」『青年劇場創立50周年記念スタジオ結第6回公演「あの夏の絵」パンフレット』。

――――，2017,「深夜の慰霊碑前に祈る人びと――8月6日深夜の慰霊碑前インタビュー調査から」松尾浩一郎編著『復興と文化の創造――被爆都市広島のビジュアル・エスノグラフィ』2015-2016年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）研究成果報告書：161-212。

小倉康嗣ゼミナール，2015,『とまり木を生きぬく人びと――唐桑・仮設住宅物語』立教大学社会学部（未刊行）。

Ritzer, G., 1996, *The Mcdonaldization of Society,* California: Pine Forge Press.（正岡寛司監訳，1999,『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部。）

佐藤健二，2008,「歴史社会学におけるオーラリティの位置」『日本オーラル・ヒストリー研究』4：3-18。

内田義彦，1992,『作品としての社会科学』岩波書店。

米山リサ，小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳，2005,『広島――記憶のポリティクス』岩波書店。（Yoneyama, L., 1999, *Hiroshima Traces : Time, Space, and the Dialectics of Memory*, Berkeley : University of California Press.）